
素敵な恋は夜明けと共に！

Coffee-milk Crazy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

素敵な恋は夜明けと共に！

【Nコード】

N2627Y

【作者名】

Coffee - milk Crazy

【あらすじ】

日本のある地方。片田舎に住まう女子高生が森の中で殺された。そして時と空間と次元を遷して、1998年7月23日深夜 アメリカ合衆国 某州 ラクーンシティ郊外の森林地帯で、ある歴史的な事件が発覚する。対処に向かった特殊部隊の中に、若干18歳の女性隊員がいた。奇しくもこの事件が彼女の初任務であった。

? Ending (前書き)

はじめまして！

一応転生物のような始め方をしていますが、先の展開にはまったく関与してきません。

してるのかもしれないけどわからないようになってます、僕もわかりません。

ただバイオハザードの世界をパラレルワールドという位置付けにするためだけのものです。

転生物嫌いの方も大丈夫なのではないかと勝手に考えています。

基本的には原作をなぞり、物語も真面目に進行させますが、死ぬ人が死ななかつたりします。

そういうのが許せない方はバック願います。

では、温かい目で見守っていただきたいと思います。

? Ending

日本のある地方。見渡す限り青々とした田園が広がる村、いや（国土地理院の調べによる限り）町なのだが……。数百年前にタイムスリップしてしまったかと思われるほどに、まさしく日本の夏風景を映しているその中心に、茶髪に短いスカートとまたしてもありふれた設定、田舎の都会に憧れる女子高生が一人歩いていた。

「はああ……、まったく、疲れた」

遠くに見える山が斜陽にさらされて、彼女の足元にまでその影を伸ばしていた。てらてらと、一向に秋の気配を感じさせない風が長い髪と稲穂をさらっていく。これで何度目になるかわからないが、彼女は乱れた髪を丁寧に耳に挟んだ。

一見して幻想的に思える景色も彼女にとってはただの日常でしかない。都会人が人ごみ、雑踏、満員電車にうんざりするのと同じことだ。また彼女はむしろその人ごみ、訂正すると、人との触れ合いに淡い幻想を抱いているのである。

この狭く退屈な変わらない世界を飛び出して、自分自身の力と愛とによってどうしても生きていけるところへ行きたい、と。彼女は常々願っていた。

「はあああ……」

しかし、思わず、ため息がもれる。ため息一つひとつが本当に幸せ

をさらっていくのだとしたら、彼女にはこの先幸せは訪れることはないだろう。

今日は親友の家に遊びに行った。彼女としては、紅茶を飲みながらファッション雑誌を傍らに二人でお洒落なトークをしたかったのだが、わかってはいたけど向こうといたら生粋のゲーマーで、一日中『バイオハザード』にかじりつきだった。しかも要らぬ解説付きで。なんでも『オペレーションラクーンシティ』で再燃したとか。しかし少なくとも彼女の知る範囲では、その作品はかつてのありしバイオハザードの面影を完全に失ったとしか言いようのないもので、よっぽどコアなファンでもない限りそれをきっかけに初代からやり直そうとは思わないだろう。

ところが彼女の親友はそのコアなファンだった。(しかもウエスカ―ぞっこんラブ)。覚めやらぬ熱気が渦巻く中、のこのこ現れた彼女はまさに巻き添えを喰った形で、隣りに座ってテレビ画面を見させられたのである。

こっぴりと絞られて、帰宅途中の現在に戻る。

日は完全に暮れた。新しく朝を迎えた世界から僅かに零れる陽光が空をくすめている様子をずっと眺めていたが、林に入ったのでそれも中断せざるを得なくなった。しばらく街灯もまばらな暗い道を進む。

「こっちはいつも肌寒いなあ……。……。きゃっ！」

突然言い知れぬ不快感が彼女を襲った。全身を舐め回されるような悪寒とも言えるそれは、明らかに藪の奥深くから発せられているようだ。

肘を摩り、膝は奮えているけれど、彼女にはその発生源を調べなければならぬような一種の使命感にも似た興奮を感じていた。

躊躇う。そして意を決して、スカートの裾を気にしつつも、藪の中に飛び込んだ。

枝々が大袈裟な音をたてて折れていく。その甲高い音がいよいよ以って彼女の息を荒げていくが、彼女は止まらない。

ちょうど大きな銀杏の木を中心に、それ以外は何故かミステリーサークルのように何も無い空間に出くわした。

そして、そこで彼女は事を見届ける神父様を演じたのである。

「ひひひ……、ようこそ」

絵に描いたような変質者だった。

ナイフに付着した血をぺろりと美味しそうに舐めて、彼女にゆっくりと近づいてくる。その背後で哀れな子羊がぐったりと倒れた。

「……………」

口をぱくぱくさせてみるが、出てくるのは空虚な吐息だけ。もはや彼女に弁明の余地はなく、この円形に拓かれた処刑場から逃れるこ

とはできないのだ。

「おや？ よく見てみれば、女の子じゃないか。ひひひ……、やっ
たぜ！ ショータイムの前の余興ができるなあ！」

彼女の薄白い腕に汗ばんだ男の手が爪痕を残す。薄皮を破って、血
が滲み出た。

「最後に言っとくことはあるかあ？」

最期の言葉。そして、するりと抜け出た言葉は奇妙な余韻だけを残
して霧散した。

「ドーナツが食べたい」

あるいはこれは彼女が望んでいたことなのかもしれない。

積み重ねた業はそれが何であれ、必ず巡りめぐって自分のためにな
るものである。

例えばそれは、彼女の願いや彼女のため息のように。

? E n d i n g (後書き)

ご意見、ご感想、アドバイス等お待ちしております。

0 Ending (前書き)

ちなみに小説タイトルは0のピリレグにあてられました

0 Ending

ビリー・コーエンは気難しい顔立ちの男で、私と出会ってから一度も笑わないどころか頬の筋肉をぴくりともさせることはなかった。決して無口なわけではなく、気の利いたジョークも時に口にするけれど、状況のせいもあるのだろうか、やはりその表情には陰りが見てとれた。

それでも朝日に照らされた今の彼の横顔がどこか晴れやかに見えるのは、私の気持ちによる錯覚だろうか。

「あれが……、隊長の言っていた洋館……」

一夜の悪夢を振り払うように彼は大きな伸びをして、私の指先も言葉も無視。そのまま寝そべって目を閉じてしまった。

所属が海軍なだけあって、肌が若干焼けていて、背が高く、体格は優に私より二回りは大きい。ぴちぴちのタンクトップを着ているので、浮き出る胸筋とむき出しの腕の迫力はもはや壮観、女性に頼もしさを感じさせるには充分だ。

かくいう私もラクーン市警に配属される前の研修で破格の肉体改造をさせられた身なのだが、どこをどう鍛えればアレになるのかまったく見当もつかなかった。これはひとえに性別の差というやつだろうか。

ただでさえ威圧的な腕をしているのに、右腕はその上から漆を塗って固めたような禍々がしいデザインの入れ墨がある。髪型はやっぱ

リオールバック。

もうなにがなんだか……。恐怖の押し売りって感じ。

こんな恰好では、さっきまで左手に手錠をぶら下げていたのも必然な気がしてくる。

例え中身が聖人でもナリがそんなんじゃ、やってないものもやったように仕立てあげられて当然よ。

……。

彼がうとうとしているのを見ると、愛おしくなって、このまま抱きついて何度も何度もキスしたくなる衝動に襲われた。

悪夢の中で、彼は幾度となく私を救ってくれた。この切ない感情は信頼や感謝から来るものであって、決して恋などではない。そう思いたい。なぜかはわからないけれど、好きになったらダメな気がする。私にとっても、ビリーにとっても。

そう頭で考えても、なかなかそのどうしようもない感情を振り払うことができなかった。

それでしょうがなく、ビリーには悪いけど、思い出をもらうことにした。

「……おい」

彼が首からかけていたドックタグをすばやく奪い取って、自分の首にまわす。後ろで何か文句を言っているようだけど気にしない気にしない。

「もう行くね」

さらりと何事もなかったように言ってやると、さすがの彼も呆気にとられていた。でも何も言わないからそのまま流していいんだろう。

「報告書には、ビリー・コーエンは死んだって書いておくわ」

「ついに俺もあの化け物どもの仲間入りってわけだ」

少しおどけて彼は言った。

「笑えないわよ。とにかくこうなった以上、あなたが犯罪者であれなけれ、ラクーンシティを離れた方がいい。いつか、このこと同じになるはずだから……」

「へえ、まるで見てきたように言うんだな。どうして悲観的に考えるんだ」

「わからない。そんな気がするの……。まあ、S・T・A・R・Sよりよっぽど強いあなたに心配なんか無用ね」

予想以上に重苦しい雰囲気になってしまったので、一転して笑いかけてみた。

別れのと きくらい、爽やかにしたいもの。

「そいつはどうも。おまえもこれからすぐに仕事だろ。寝てないからって、仲間とゾンビ、間違えるんじゃないぞ」

あはは、と少年のように明るく笑った。

あれ？ ビリーって……。

「レベッカ、こいつも持っていけ」

呆けているうちに放り投げられたので、危うく取りこぼしそうになった。手のうちには昨夜の立役者、S & amp; W社製マグナムリボルバー・アンブレラカスタムがあった。危ないとか、投げるなとか、それじゃビリーの手持ちがとか、いくらでも言うことはあったけど、黙っておくことにしよう。

今は彼の笑顔を脳裏に焼き付けることに専念する。
きつとそれはビリーにしたって同じはずだ。

しばらく見つめ合って、それから握手して、お互い向き直って歩き出せば、それでいい！

0 E n d i n g (後書き)

ご意見、ご感想、アドバイス等お待ちしております。

The Nightmare comes again . . . (前書き)

／悪夢ふたたび

タイトルはゲーム本編の会話などを参考にして考えていきます
和訳は適当です

見上げると、太陽はすでに高く昇り、暖かな日差しを地上に降り注いでいるのが木漏れ日に見て取れた。青々とした葉の香りが漂って、いい森林浴になるなあとは思いつけれど、足取りは決して軽やかではなかった。

一人になって、周囲の警戒はずいぶん大変になった。ビリーから受け取ったマグナムではなく、右手に自前のベレッタを腰に構えて、小まめに辺りを見回しながら、音をたてないように早足で進む。

明るくなったとはいえ、アークレイの深い山林は相変わらず視界が悪く、すべてをさらけ出してはくれない。どこにどんな化け物がいるかわからない状況では、ピクニックなんてできるはずがなかった。そもそもそんな気分でもないが。

……。

一夜のうちに大切な人を失った。

エドワード・デューイ。私の先輩の一人だ。

私はこの部隊に配属されたばかりなので、プライベートに話す機会はほんの数回しかなかったけど、本当にどこまでも面倒見がよくて、素敵な男性だった。

つい先日、私の歓迎会を口実に署の経費で落とされたチームでの飲み会で、酔っ払って私を口説きに来た彼のバカみたいにはしゃいだ表情が脳裏を過ぎる。

「……………」

昨夜、彼と再会したときには、もう手の施しようがなかった。頸動脈を傷つける大きな切り傷、左手首がちぎれ、体の至る所は食い破られていた。本当に命からがら、安全な死に場所を求めて現れたようだった。

それをただただ見守るしかなかった。

あの状態では早く安静な死を彼は望んでいただろうし、私も楽になつてほしいと願った。

そして彼は息を引き取った。

でもそれだけでは終わらなかった。

終わらせてくれなかった！

彼はあの虚ろな瞳で私に牙を剥いたのだ！

他の人たちと同じように！

……………。

私はそれに銃を向けざるを得なかった。彼が私に牙を剥いたのと同じように。私は彼を撃ち殺さなければならなかった。

数十分前まで共に戦った仲間すらも……………。撃たなければならなかった……………。

……………。

誰がこんな酷いことをする？

誰がこんな非人道的な研究をしている？

私はそいつらを見つげ出して、必ず捕まえる、いや殺してやる。

二度と人が人を喰うことがないように、人が道を外すことがないように。

だからせめてそれまで、私が銃を向けるのを許してほしい。それは私が自分と、みんなと、その人を守るためだから……。

あるいはこれはただの責任転嫁や自己完結かもしれない。

でも私にはこれしかできないから……。銃を向けているのは後ろに潜む大きな陰謀なんだ、って言い聞かせていないと私だって……。

「……………ッ！」

藪の中から突如として踊り出た何かを、咄嗟に前転して躲す。

すぐさま体勢を整えて辺りを見回す。威嚇しながら隙を伺うように低く構えている一匹のドーベルマンがいた。

体中の肉が朽ち果て、脳や目はむき出し、腹からは腸やら体液やらが垂れ流しになっている。明らかに死んでいるはずの生き物が確かに歩いてきた。

これが……ゾンビ。

改めて自分が悪夢の中に舞い戻ったのだと意識させてくれる。心臓が高鳴り、手には汗が滲む。疲れも眠気も空腹も尿意も、戦闘の邪魔になるものすべてが排除された。

意識は引き金に触れる指先と目標を捉えた視覚を尖らせ、無意識のうちに持てる感覚全部でもって周囲を警戒する。

ゾンビ化しても野性の本能は残るのか、ゾンビ犬は群れていることが多い。そのことはすでに経験からわかっている。死角からの連携には気をつけないといけない。

先に動いたのは向こうだった。

助走無しの跳躍で一瞬のうちに懐に潜り込んだドーベルマンは、その全体重でもって私を軽く押し倒した。その衝撃でベレッタを落としてしまうが、私の喉元を喰いちぎらんとする口腔を、首を掴んで阻止する。

だらだらと垂れ流しになった唾液が顔にかかる。

あまりの悪臭に本能的に堪えられなくなって、思わずゾンビ犬の腹を蹴りあげた。肋骨が折れて、不快な感触が足に残るが、構わず横転して、ベレッタを拾う。

立ち上がったとき、向こうはすでに駆け出そうとしていた。

ぬるぬるな顔を拭うのも後に、奴が走り込んでくる位置とタイミングを先読みして、今度は蹴りを振るう。知能が低下しているらしく、そのまま突っ込んできたドーベルマンの腐った下顎に、鉄板入りのブーツが直撃。顎が粉々に砕け散り、攻撃手段を失ったゾンビ犬は呆然として地に平伏した。

私は左手にハンカチを持って汚れた顔を拭きつつ、右手のベレッタを静かに構える。

命請いをするように、あるいは正気を取り戻したように見えるゾンビ犬の瞳が映った。

「……………」

しかしこれは私の気の迷いだ。

彼らはすでに死んでいる。

このドーベルマンも、エドワードも、他の善良なる市民も。

中身を失った彼らの中に見えるものは、それは見ている私の心の投影に過ぎない。

付け込まれてはいけない。

これこそが裏で糸を引く奴らの思惑なのだ。

人の脆い部分を揺すぶって、生き残ろうと受け入れようと、後味の悪い結果しか残さない。

最低最悪の大犯罪が密かに行われていたのだ。

……。

無言のうちに引き金を引く。

露出している脳に銃弾が吸い込まれ、糸が切れたように一つの有機物が崩れ落ちた。

The Nightmare comes again . . . (後書き)

ご意見、ご感想、アドバイス等お待ちしております。

1 Opening

もともと私たち、ラクーン市警所属特殊作戦部隊、通称S・T・A・R・S (Special Tactics And Rescue Service) のブラヴオーチームは、アークレイ山地で人が食い殺されるという猟奇的殺人事件の調査に出動していた。しかし現場に向かう途中、乗っていたヘリコプターがエンジントラブルを起こし、緊急着陸を余儀なくされる。私を含めて六人の隊員は仕方なく、そこから別行動で調査を開始した。

私はアークレイ山地を横切るように走る黄道鉄道の線路上に不自然に停止した列車を発見。

中の調査をしていくうちに、ゾンビや擬態化したヒルの化け物に襲われ、そしてそこで助けられる形でビリー・コーエンと出会った。

私たち以外？無人？のはずの列車が突然動き出し、ある施設に辿り着いた。捜査する途中で、同じ施設に独自に潜入していたエンリコ・マリーニ隊長と話す機会があつて、そのときに隊員が森の中で発見した古びた洋館に集まるように指示された。隊長は一緒に来るように言ったが、わけあつて施設に残らなければならなかつた私は、ビリーと共に施設の破壊と脱出を試み、辛くも両者とも成功する。

予想以上に巨大な事件に巻き込まれ、当初予定されていた捜査終了時間はとつくに過ぎている。

ヘリが墜落して、本部と通信もできていないだろうから、もしかしたら昨日の時点では待機命令が下っていたS・T・A・R・Sのもう一つの部隊、アルファチームがそろそろ救助に出動しているかも

しれない。

アルファチームのメンバーには会ったことがないけど、話を聞いた限りでは、ベテラン揃いでチーム内の練度は高く、さらに各方面で秀でたエースを集めたとのことだから、ブラヴォーチーム以上にこの状況に適していると言えなくもない。

要するに、私みたいな新人にしてアマチュアな隊員はいないということだ。

……。

とにかく、アークレイ山地の深い森を脱出するためには、彼らが乗ってきたヘリに便乗するしか手立てはない。彼らがちょうど洋館にいた私たちを発見してくれることを祈りつつ、仲間と合流して少しでも多くの資料を集めることが今の私にできることだろう。

洋館に辿り着いた頃には、夕暮れになっていた。あの丘から見た時は大した距離ではないと思ったが、警戒して迂回迂回しているうちにすっかり暗くなってしまった。日没前に到着できたのは不幸中の幸いだが……。

曇った窓から煌々と灯りがもれているのを見ると、すでに誰か到着しているのだろう。

洋館の外見は予想に反して小綺麗なものだった。所々壁の木材がくすんでいたり、窓ガラスが割れていたり、地面から蔦がその手をのばしていたり、と最近になって人の手が加えられなくなった証拠を表しているが、まだまだ建てられた当初の立派な風格は忘れていないといった感じだ。

しかしそれでも、中から溢れ出る死臭というか、化け物がいることを確信させるただならぬ雰囲気は、まるで隠せていなかった。建物の荘厳さと中に潜む人ならぬ人の気配が不思議なことにもうまく折り合いをつけて、結果的に妙に納得してしまう雰囲気を醸している。

正面玄関の扉のすぐ脇の壁に背をあずけて、いつでも突入できる体勢だ。

右手に握るベレッタのマガジンには十五発きっかりフル装填。予備弾薬だってまだまだあるから当面の間は問題ないだろう。

ビリーからもらったマグナムリボルバーは腰のホルスターにしまっ
てある。予備弾薬はなく、五発の最大装弾数の内、一発はすでにピ
ルの化け物に使っているから、残り四発。強力な火器だけに下手な
場面でおいそれと使いたくない。っというわけで、たぶん出し惜し
みされる。

……。

実は、銃器はこの二つしかなかったりする。

人間に対してならばまだしも、化け物に単独で挑むには圧倒的に火力に劣り、制圧力なんてまるで無に等しい装備だ。

先の施設を脱出する際に散弾銃を壊してしまったのが、つくづく悔やまれる。

だいたい、こんな事態になると予測していなかったとはいえ、そもそも新人だからって救護担当に回して、碌なものの装備させてくれなかった隊長たちが悪いんだ。メディック【衛生兵】だなんて馬鹿にして！

……。

不本意ではあるが、しかし、救護担当なので人よりも多少持ち合わせている薬品は多い。救われることもあるけど、やっぱり銃のが欲しかった。その気になればハーブを調査することだってできるし、何故か先の施設には化け物の数と同じくらいの医薬品とハーブがあったので、ストックがたくさんできた。

私の装備はだいたいそんなものだ。あとはナイフくらいで、役に立つものはない。

……。

「オーケー。行こうか」

言葉と共に息を吐く。そして大きく吸い込む。

手持ちの確認は済んだ。

手元のベレッタを見つめる。安全装置は問題なく外されている。

「……この先に何があっても驚かない。焦らない。慌てない」
胸に左手をあてる。

覚悟は決まった。

ドアノブに左手をかける。

力を込めて、ゆっくりと回す。

あとは勢いよく開け放ち、すばやく飛び込

ッ！

「え？」

1 Opening(後書き)

ご意見、ご感想、アドバイス等お待ちしております。

S u r v i v e y o u r s e l f a n d S e a r c h f o u r t h e

/ 仲間と共に生き残れ

扉を開くほんの一瞬前に、甲高い銃声が聞こえた。近くではない、でも明らかに外で響いたものだ。ベレッタを握る手に力が入る。

玄関から少し離れて辺りを見回してみた。異変はすぐに見て取れた。

「何、あれ……」

洋館の直上をカラスが群れを為して旋回している。数はそれほど多くないが、どこか様子がおかしい。羽をばらまきながら激しく翼を振り乱し、辺り構わず吠え散らして、興奮している。

「何か屋根の上にあるの……？ ……あっ」

旋回していたカラスが、突如、一斉に急降下　同時に銃声が連続して鳴り響いた！

「誰かいるんだ！　行こう！」

背中に背負っていたフックショット　先端に鉤状の針が付いているワイヤーを射出できる大型銃で、昇りたい場所に引っ掛けると、あるいは撃ち込むと、ボタン一つで巻き上げてくれる　を構える。黄道列車の中に備え付けられていたものだが、役に立つので持ってきていたのだ。

バッテリーの残りも気になるが構ってはいられない。

強い反動を残してワイヤーは発射した。排水パイプに上手く絡み付いたのを確認してから、ワイヤーを巻き取る。すう、と体の中に空気が走り回るような、気持ちいいとも悪いとも言い難い感じがして、屋根に到達、ぶら下がった状態から体を振り子のように揺らし、屋根の上に飛びのった。

「……屋根の上じゃない？」

斜面の至る所に黒い羽は落ちているだけで、屋根の上には誰もいなかった。しかし相変わらずアサルトライフルの連射音が聞こえる。東側からだ。フックショットの留め具を取り外してから、そちらへ向かって斜面を駆け登る。

洋館はだいたい長方形に建築されているようだ。三角屋根のてっぺんに立つても、全体を見渡すことはできないくらいに大きい。

他にも森の中に何か小屋みたいなものも隠れているが、今は注意して見ている場合でもない。

東側の短い辺の端あたりで例のカラスたちがひとしきり騒いでいる。屋根の下に潜り込んだかと思うと、すぐにふたたび空中に姿を現して、戦闘機のように旋回してアサルトライフルの銃弾を躲す。たぶん二階のテラスかどこかで、激しい戦闘が繰り広げられているのだろう。

私からはまだ支援のしようがなかった。この距離からベレッタでは動き回るカラスを捉えることはできないだろうし、ましてあの小さ

能的に走りながら当てることなんて私には到底無理な話だ。

ようやく端が見えてきたときに、銃声の連続が途絶えた。きつと弾切れかジャム（弾が詰まること）かだ。弾幕が途切れてしまった。

あ、やばい、と思った瞬間には、逃げ惑っていたカラスたちが一斉に急降下していた。カラスの鳴き声だけで、その後まったく銃声が聞こえてこないあたり、完全にやばい。

走りながら抱えるようにしていたフックショットを持ち替えて構える。だいたいの距離を測って、再度排水パイプに絡ませた。当然、すぐに巻き取るなんてことはしない。そのままワイヤーを辿るようにして走り続ける。

屋根の縁は目前だ。

人生で一度だけバンジージャンプに挑戦したことがある。小さい頃、オーストラリアかどこかだったと思う。断崖絶壁から飛び降りる荒っぽいバンジード。ゴムが伸びきると海の飛沫を感じられるほどのそれはもう死ぬほど怖いものだった。

あれを経験して以来、二度とバンジーに金を払うまいと心に決めていたが、生憎職業柄、似たような訓練を山ほどさせられた。その度に目に涙を溜めて、みんなに馬鹿にされてきたが、結局恐怖が消えることはなかった。

だから今、物凄く怖い。正直涙も出てる。

でも、仲間の命には代えられない！

「きゃああああああつ！」

全力疾走のまま踏み切る。

遠くの山がブレて浮き上がる。

みつともない声をあげてしまったが、誤射される可能性を排除できたと考えれば、恥ずかしいこともない。……なんともないんだ、本当に。

少し飛び出たところで、ワイヤーの遊びがなくなった。

ぴんと張られた瞬間、ベクトルは反対に、加えて急速に落下を始め、弧を描いて洋館に引き付けられる。

やはりテラスで戦闘が行われていた。誰かはわからないが、素手で必死に抵抗するブラヴォーチームの隊員と数羽のカラスがもみくちゃになって、今にもその鋭いくちばしや爪で傷つけられそうになっている。

すかさず、ちょうどへその前に、ベルトで挟んでいたベレッタを取り出す。が、ついフックショットにしがみつくことに夢中になりすぎて、利き手ではない左手でやってしまった。

構えたはいいが、照準が定まらない。下手に撃つては仲間にあたつてしま

「うわっ！」

バランスが崩れた。というか鉤爪の引つ掛かりが甘かったために、ワイヤーが外れたのだらう。なすすべもなくテラスの中央方向に放り出される。隊員の姿も見失って、もうだめかと思つたががががあ

っ！

……。

「あたたた……」

こうとうぶ……きよ、強打した……。

……。

バランスを崩したおかげで、どうやら放り出される方向がちょうど隊員の位置と重なったらしい。彼の背中と私のお尻がぶつかって、二匹のカラスを押し潰したらしい。（……くちばしがちよつと痛かった）。私はそのまま頭から崩れ落ちて、左手にあったベレッタと彼は壁に激突していた。

あまりに唐突な、あまりに壮絶な私の登場に、さすがのカラスも面食らったようだ。意識を失いかけた私の頭上をただ呆然として羽ばたいていたカラスたちは、次の瞬間には次々と落とされた。

ノビている私のお腹の上を、痙攣したカラスが覆い尽くす。さすがに気味が悪くなって、まだふらふらするけれど立ち上がった。

「危うく目玉つつかれちまうところだったよ。いや、助かった。……しかしどんな助け方なんだ？」

……。

フォレスト・スパイヤーは命の危険にさらされた直後とは思えないほど冷静に、そして微笑みながら空になった弾倉を外して、私のベ

レミタを返して近づいてきた。

S u r v i v e y o u r s e l f a n d S e a r c h f o u r t h e

ご意見、ご感想、アドバイス等お待ちしております。

フォレスト・スパイヤーはブラヴオーチームの中で、一番射撃が上手い。その腕はS・T・A・R・Sの、というかラクーン市警のE・I・S・オブ・E・I・S、アルファチーム所属クリス・レッドフィールド隊員とタメを張れる程のものだという。あの数瞬のうちに十数匹のカラスを打ち落とした技術は、その噂を十分に証明しているだろう。加えてすらつとした体躯のわりに、重火器を自在に操つての後方支援にも定評があるらしい。一種のオールラウンダーに近いのかもしれない。

性格も非常に温厚かつ冷静で、仲間からの信頼も厚いようだ。S・T・A・R・Sの二十代のメンバーの中では一番の古参らしく、次世代のリーダーを担うことになる優秀な逸材だと、飲み会の席でエンリコ隊長が零していた。

今回の任務での役割も後方支援担当で、かなり重装備だ。特にベルトや防弾ジャケットに携帯された無数の手榴弾が本当に恐ろしい。銃で撃たれたらその瞬間に爆散するにちがいない。ある意味、命知らずなタフガイでもある。

……。

「先輩ほどの名手がカラスにつつかれて死んだなんて知れたら、未代までの恥ですよ。奥さんや子供にどう言い訳するつもりですか」「いやあ、拳銃の弾切らしちまってよ。取り回しの悪い武器しか持

ってなかったんだ」

アサルトライフルとグレネードランチャーを示して、おどけた感じ
で言うが、顔はまじめだ。プロ意識の高い彼なら私が説教するまで
もなく、内心猛烈に反省しているのだろう。しかしチームのエース
に簡単に死んでもらっては困るので、もう一度だけ釘を刺しておく。

「本当、気をつけてくださいよ。頼りにしてるんですからね。……
ベレッタの弾少し分けてあげますから、死なないでください」

たしかに彼が持つその二つの組み合わせは共に銃身が長いので、す
ばやく飛び回って接近してくるカラスに対しては少し分が悪かった
かもしれない。特にグレネードランチャーなんかは弾速も遅いから、
振り回して鈍器として使う以外はただの重りでしかなかったろう。

ポーチから取り出した弾薬を、彼は肩を竦めてから受け取った。

ハンドガンは全員、基本的にS・T・A・R・S仕様のものを使っ
ているので弾を共有できる。許容できる範囲で目一杯渡してやった。

「おいおい、こんなにくれて、おまえは大丈夫なのか？」

「はい。さっきたくさん拾ったので」

「そうか、じゃ遠慮なく」

渡した弾薬を次々ジャケットのポケットに入れた。不意に私の目を
見つめて、真剣な面持ちで口を開いた。

「……おかしいよな」

「え？」

「いや、これは俺の勝手な推測だが……これはただの事件じゃない。

S・T・A・R・Sは利用されてるんだ」

「……どういうことですか？」

「いいか。おまえがどこかで弾薬を見つけたように、俺もこの洋館の中でいくつも見つけたんだ。……その中にはグレネードランチャーの硫酸弾もあった。しかもご丁寧に俺のこいつと同じ種類のな。考えられるか？ 何の目的に建てられたかわからないが、普通のマシオンに、いくらなんでも硫酸弾を用意することなんてないだろう？ ……他の弾薬だってそうだ。ハンドガン、アサルトライフル、ショットガン、マグナム、どいつもこいつもS・T・A・R・Sで採用されてる口径とぴったり同じなんだ。……ここまできると、誰かが意図的に配置したと考えるのが当たり前だろう？」

「それはそうですけど……」

たしかに先の施設にも多くの武器弾薬、医薬品があった。もともと生きていた人が使っていたというには不自然なくらいそこら中に落ちていたし、親切にもすべての弾丸の種類が銃に合っていた。

「それとゾンビやゾンビ犬みたいな元の生物がそのまま狂ったようなのは違って、明らかに手の加えられた、つまり原形がわからないほど姿が変わったランチャーがいただろ？」

「ええ、いましたね。そういうのは概して強敵でした」

「そうだな。そして俺が注目したのは、それらは決して被っては出てこないということだ」

「かぶって？ 複数が同時について意味ですか？」

「そうだ。同じ奴が二匹同時になんてことはあったが、決して違う種類のランチャーが一斉に襲い掛かってくることはなかっただろう？ しかも強敵と出会う前には、必ず強力な武器が手に入る。……おそらく事件の首謀者は、俺たちにランチャーと互角に戦ってもらいたいんだろうな」

……。

「S・T・A・R・Sを利用して、クリーチャーの実践データでも採っているんだろう。俺たちはプロの集団だからな。戦闘能力はそれなりのもんだ。それに片田舎のちっぽけな町警察所屬だから、軍部にやらせるより都合がいい。……上手く罠に嵌められちまったってわけだ。もしかしたらその辺に監視カメラがあつて、今も俺たちを見張っているのかもしれないな」

フォレストは両腕を開いて、天を仰ぎみる。神様を恨んでいるのか、それとも自分の不運を呪っているのか、いずれにせよ諦めに似たポーズだ。

彼の推測はいくらか突飛過ぎる気もする。しかし昨夜を振り返ってみても、否定する要素どころか、むしろ彼の言うとおり、肯定せざるを得ない証拠と為り得るものがいくつも浮かび上がってくるのは事実だ。

「……先輩。それでも、私たちはS・T・A・R・Sです。向かう先が明らかに罠だとしても、利用されているにしても、やるべきことは決まっています。襲い掛かる化け物を駆逐し、首謀者へつながら証拠を集めて、ここから脱出して世間に公表するんです！ S・T・A・R・Sを舐めたら、ただじゃ済まないことを見せてやりましょう！」

本当に利用されているとしたら、それはむしろ好都合。捜すまでもなく犯罪組織がこちらに歩み寄ってきているのだ。

すでに垂れ下げられた釣り針に無理矢理くくりつけられてしまったのなら、釣人を池の中に、こちらのテリトリーに引きずり込んでやるだけだ。

「新人のくせに威勢がいいな。でも言ってることはまさにそのとおりだ。俺たちはこういう事態のときのためにいるんだっただな」

言いながら近寄ってきたかと思うと、腕を私の首に回してそのまま抱き寄せた。あわわっとしていているうちに、彼は私の頭に鼻先を置いて匂いを嗅いでいるようだ。

「……………」

セクハラでは、と言おうとも思ったが、人間味が恋しくなっていたのは私も同じだ。

彼の腕の温もりや汗の匂いを感じていると思わず涙が出そうになった。

S u r v i v e y o u r s e l f a n d S e a r c h f o u t h e

ご意見、ご感想、アドバイス等お待ちしております。

S u r v i v e y o u r s e l f a n d S e a r c h f o u r t h e

鍵の概念は曖昧です

そこはリメイク版ではなくWii版のイメージでお願いします。

「……そうか。エドワードは死んだか」

辺りはいよいよ闇が深まって、どこからか立ち込めてきた暗雲が、不気味な満月を今にも隠そうとしていた。ヘリが飛べないほどの嵐にならないようにと祈りつつ、いつまでもテラスで立ち話しているのも危険なので、とりあえず安全が確保されているというエントランスホールへ移動を始めた。慎重に進む彼の後ろを、背後を警戒しながらついていく。一応テラスに来る際に、クリアしているらしいのだが、念には念をおく。

ホールに続く廊下に、黒焦げになったゾンビが数体ほど倒れていた。フォレストがグレネードランチャーの焼夷弾でもって倒したのだという。彼が言うには、ゾンビに対して焼夷弾は非常に有効らしく、ほぼ一撃で仕留められるとのことだ。しかし床や壁に引火しないのだろうか。

……。

狭い廊下で会敵すると、それが例え移動の遅いゾンビであっても避けることは非常に困難だ。だから一体々倒してクリアしてから進むか、引き返して別のルートを探すしかない。

「ケビンのやるうはどつしてるかなあ。上手く生き残っていればいいが……」

ケビンという人物（実はよく知らない）は、S・T・A・R・S隊員ではなく一般署員だ。ヘリで私たちを送り届けた後は、一度署に戻って任務終了時間に迎えに来てくれる予定だったが、エンジントラブルで緊急着陸したために、森の中でヘリの修理しながら待機することになってしまった。こんな危険な状況になっているとは知らず、護衛も残さずにここまで来てしまったが、彼は無事だろうか……？

ゴッグル越しの優しい目つき、親指を立て、初任務に臨む私を励まして送り出してくれた彼の姿が、今でも私を支えてくれている。

きっと彼も生きている。なんとなくそんな気がする。そうであってほしい。

今はそれを信じて進むしかない。

……。

「そっぴやビリー・コーエン死刑囚はどうなった？」

「私が黄道列車の中で発見しました。……抵抗したのでやむを得ず射殺しました」

「そうか。……大変だったな」

大方の報告や情報が出尽くしたとき、ちょうどタイミング良くエントランスホールに出た。

狭苦しい廊下と扉一枚隔てたところに、広大な空間が現れ、一瞬目が眩んだ。至る所に凝った装飾がなされ、高価な調度品がさりげなく置いてある。特に嫌でも目に入る、ホール中心に天井からぶら下がるきらびやかで巨大なシャンデリアと、私からは右手に見える、玄関扉から入って真正面の階段を上がったところの壁全面を使った

抽象画は、来る者に金と権力を示すには十分過ぎる威圧感を放っている。

「ここには何もいないようですね」

「ああ、最初からな」

端から端まで続く渡り廊下を真ん中まで行って、階段を降りる。抽象画の壁に突き当たる踊り場で立ち止まって見上げてみる。何の絵かわからないけど、やはり圧倒されてしまうものがあって……あれ？

「先輩、これって扉ですか？」

絵の中から飛び出るように扉の取っ手らしきものがあつた。よく見ると若干隙間も空いていた。

「本当だ」

「知らなかつたんですか？」

「ああ。リチャードと調べたときには気付かなかつたな」

しっかりしてくださいよ、と言いつつ突入してみるかアイコンタクトで問う。彼が頷くのを見て、ベレッタを構えて扉の取っ手を掴んだ。無言のうちに配置につく。私が扉を開けて、彼が先に飛び込んで、その後を追う、というのは今さら確認するまでもない当然の役割分担だろう、たぶん。

ハンドサインでタイミングを合わせ、勢いよく開け放つ。転がり込むように突入した彼を、背後を確認し少しだけ間を空けてから、追う。

敵はいなかった。薄暗い廊下が続ぎ、階段があつたので降りる。そ

の先で突き当たった扉を、フォレストが一人で、ドアノブを捻って蹴り破った。

続いて中に入っ 爆発音ッ！

「うあっ！！」

同時に視界が真っ白になる！

咄嗟にしゃがみ込んで目を抑えたが、すでに遅かった。うっかりグレネードランチャーのマズルフラッシュの激しい閃光に目をやられてしまったらしい。

何も見えない中、二度目の爆発音を聞いた。ゾンビがもう一体いたのだろっ。その後、耳鳴りだけが残る。

フォレスト（と思われる人）が私の腕を掴んで、やや乱暴に引き起こした。目をぱちぱちさせたり、擦ったりしながら臃げな人影に向き直った。

「大丈夫か？」

「あい……大丈夫……」

……ではないです。

「……おまえなあ、銃口の前に飛び出すなよ。きれいな顔をわざわざざぐちやぐちやにしたいのか？」

……。

「だって訓練ではこういうときは左右に展開するようになって。先輩が左に出たから……」

「その右側にゾンビがいたんだよ！ 前に出た奴の射線に入らないようにするのは基本だろう！ しっかりしてくれよ、本当に」

ああ、ようやく見えるようになってきた。心配しているのか、怒っているのかよくわからない表情のフォレストが映る。

近くに一体、鉄柵の向こう、階段を折り返したところに一体、焼死体が転がっていた。

「オーケー、すみませんでした。進みましょう」

……。

ここはどんな場所だ？

コンクリートと鉄柵で舗装された道が続き、外側には木々が生い茂っている。中庭だろうか。

少し進んで低い段差を降りたところである存在に気がついた。

「墓石……ですよね」

「……だな」

鉄柵の向こうに墓石が並んでいた。ぼろぼろに崩れているものもあれば、真新しいものもある。誰かが死んで、誰かが埋めたのだろう。

「スリラーみたいなのは勘弁だぜ」

「笑えませんね」

冗談が冗談にならないのが現在の状況なのだが……。とりあえず墓地に異変はないけれど、注意して進む。

道なりに進んでいくと不意に幅が狭くなって、石の壁に行く手を遮られた。石の壁には弓矢の絵が掘られていて、矢じりの部分が不自然に深くなっている。何か意味があるのだろうか。

「どういうことですかね？ 例の謎解きでしょうか」

「さあな、さつぱりだぜ。……いや、待てよ。弓矢と言えばさつきどこかで見えたな……。ああ！」

突然、フォレストは鞭で打たれたように来た道を引き返した。

「ちよつ！ 先輩！」

「おまえはホールに戻ってろ！ 忘れ物を取ってくるっ！」

……なんなんだいったい。

まああの様子なら謎が解けたんだろうけど。この件は彼に任せておけばいいか。

言われたとおり、足早に墓地をあとにする。階段を昇って、ホールにつながる扉を静かに開ける。

……異常なし、と。

この場所だけは何か神聖なものに守られているかのようで、なぜか安心できる。

扉の脇に背をもたせて、腰を下ろした。三角座りで膝の上に顎をの

せて、一息つく。

……。

フォレスト先輩と合流して、少し気が楽になった。しかし信頼できず頼りになる仲間となると、どこか必要以上に気が抜けてしまう。さつきから私は先輩の足を引っ張り過ぎだ。

これじゃ、あの施設を一人で破壊して脱出したっていう報告はちょっと無理があるかなあ。事実、ビリーがいなければ施設に辿り着けずらいなかつただろうし。でも間違ってもビリーと協力したなんて言えないよなあ。……どうしよう。

「ビリーのやつ……、どうしてるだろ」

半日歩いたくらいでは、アークレイの深い森は抜けられないだろう。化け物がうごめく暗闇の中で、彼は生き残っているだろうか。

「まあでも彼が死ぬなんてのは考えられな……ん？」

犬の声が近づいてくる。

なんだ　何が起こった？

腰を屈めて、階段の手摺りに隠れる。
ちょうどその時、外で銃声が鳴った。

「……ス！　こっ……！！」

「ち………う！」

「あの………で………れ！」

叫び声が聞こえる。

また何回か銃声が響いてから、扉が荒っぽく開いた。
身構える。

数人が転がり込んで、最後に入ってきた金髪の男が扉を閉めようとするが、数匹のゾンビ犬が鼻先を隙間に擦込んでいた。
男は拳銃をその切っ先に突き付けると、無表情のままに次々と撃ち吹き飛ばしてから、静かに扉を閉めた。

「ここは……」

「普通の館じゃなさそうだな」

「みんな大丈夫？」

「なんとかかな」

……。

これが……アルファチーム。

S u r v i v e y o u r s e l f a n d S e a r c h f o u r t h e

ご意見、ご感想、アドバイス等お待ちしております。

赤茶色の防弾チョッキを着た中年の隊員が無線機に盛んに呼び掛けている。応答しろ、とか、命令違反だぞ、とか、今すぐ引き返せ、とか、だいたいネガティブな内容だ。どうやらヘリの操縦士に連絡しているようだが、向こうからの返答はない。しばらく通信を続けてようやく諦めたかと思うと、今度はいらいらした様子でマグナムリボルバーの弾を詰め替え始めた。

「ブラッドはどうしたっていうの？ それにさっきの犬……。ジヨゼフが……」

「悲しむのは後だぜ、ジル。こうなった以上、今できることをしないと俺たちまでやられちまう」

混乱している様子の女性隊員を励ましている男性隊員だが、自分自身あまり言葉通りにしているようには見えない。かなり暗い顔で、がちりとした肩は明らかに萎縮している。

そんな中、ただ一人だけ冷静に腕組みをしている金髪の男。この変に落ち着き払った立ち振舞いといい、ゾンビ犬を見ても眉一つ動かさず撃ち殺したことといい、薄白い肌に妙にサングラスが似合っていることといい、なんだろう、ただならぬ風格を纏っている。

たぶん、あれがアルファチームの隊長だろう。……しかしあれは場数を踏んでるとかその程度で言い表せる雰囲気なんだろうか。

……。

状況から見て、アルファチームの到着は私たちが予想していたほど事態の好転には繋がらなかったようだ。彼らもまた、私たち同様の狂気に満ちた悪夢に引きずりこまれてしまったらしい。

へりとも連絡は取れないし、装備を見てみてもお世辞にもまともな装備とは言えない。赤茶色の中年がマグナムリボルバーを持っているほかは、ハンドガンしか持っていないように見える。（青年の男性隊員に至っては手ぶらに見えるんですけど……なんで？）。私たちが行方不明になったことを考えれば、もう少し重装備で助けに来て欲しかった。……本部と音信不通になってしまったことが、ここまで尾をひくことになるうとは。

いや、今さら悔やんでもしょうがないか。

さっさと合流して状況を説明したいところなんだけど、生憎初対面で、しかも向こうはピリピリしてるから、下手な登場の仕方したらフオレストのときみたいな間違いなく蜂の巣にされてしまうだろう。下手に隠れてしまったため、完全に出るタイミングを逸していた。

どうしたものかー。

……。

うーん。

……普通でいいかな。

ベレッタをベルトに挟む。ゆっくりと立ち上がって、手すりに手をかけ、階段を降り始める。

「アルファチームのみなさん。はじめまして。わたし
「フリーズっ!!!」

全員が一斉に得物をこちらに向ける。一人だけナイフを構えているの
がいるけど。

……。

いや、こうなるってわかってたよ。

「何者だ!」

「ブラヴォーチームの者です」

両手を上げてやるせなく言った。

アルファチームメンバーは揃って疑いの念がこもった視線を向ける。
こんなやつ知らねえよ、とか、嘘だろこの悪党、とか、小娘のくせ
しやがって、とか、ジョゼフの仇よ、とか、敵意むき出しのテレパ
シーが辺りに飛び交っていた。

……ねえ、隊が違うとはいえ、新入りが入るんだから履歴書くらい
見といてよ。写真だってあるんだから。

「先日付けでブラヴォーチームに配属されました、レベツカ・チェ
ンバースであります」

……。

「……ああ、例の新入りか」

ようやく金髪の隊長さんだけ気づいてくれた。他の隊員は未だに疑っている模様。

こんな調子で大丈夫なんだろうか。両チームの相互支援的に。実はあんまり連携とれていないのではないか。

……ため息。

昨日から続く私たちを取り巻く状況を、簡単にかつ多少改竄して報告する。話している間に、天気が荒れてきたようで、次第に雷が闇夜を断続的に切り裂いて怒号を響かせるようになった。ある意味、こんな日にぴったりの空模様になったと言える。

……。

「なるほど。だいたい状況は飲み込めた」

金髪サングラスの隊長風の男改めアルバート・ウエスカー隊長は終始腕組みをしたまま、驚いたり、憤慨したり、泣き出したりする隊員たちを静かに制しつつ、報告が終わると一言だけ口にして、額を押さえて黙ってしまった。散っていった仲間に祈りを捧げているのか、あるいは今後のことを考えているのか、その表情からはわから

ない。

「本当に、あなたが一人でその、化け物みたいな人喰いヒルやニメートルを超える巨人を相手に生き残って、さらに施設まで破壊したって言うの？」

今度は、一見して一番か弱いかと思っただが、実は隊長の次に話を冷静に聞いていた女性隊員、ジル・バレンティンが質問した。

「ええっと、まあそういうことになります」

「信じられない！」

たしかに私自身話していても信じられるような内容じゃなかったけど、でも半分は本当になるのかなあ。実際は二人だったわけだから。……そういう問題じゃないか。

「信じないもなにも、ここに彼女が生きて俺たちに事件の惨状を報告してくれているのが、なよりの証拠だろう」

丸顔に携えた髭がなんとも渋い、中年隊員バリー・バートンがどぎまぎする私をフォロウしてくれた。目元はエドワードのために流した涙のせいで腫れあがって、充血している。

「配属されてこれが初任務かよ。しかも戦闘が専門じゃないのに凄いな。大したもんだ」

短髪長身、がっちりとした体型、明らかな体育会系な男性隊員。例のエース・オブ・エース、クリス・レッドフィールドが私の頭を撫でた。

このエース、意外と間抜けでゾンビ犬に追われている間に、拳銃を落としてしまったらしい。それで丸腰なんだそうだ。

……。

「クリス先輩、私のマグナムリボルバー貸してあげます。いつまでもナイフだけってわけにもいかないでしょう?」

「でも、きみは……」

「こっちはなんとかします。気にしないでください」

「そうか? 悪いな」

……なんでこう先輩の心配ばかりして、自分の装備を心細くさせてるんだろ。

「おーい、弾は? まさかこれだけってことはないよな?」

「え? あ、えーっと、弾はそれだけに……」

やばい。忘れてた。

「弾なら俺が持つてるよ」

バリーがこちらに歩み寄りながら言った。そういえば、彼もマグナムリボルバーを持っていたな。

「バリー、この口径の弾持つてるの?」

「クリス。俺を誰だと思ってんだ? このタイプだと口径は……」

ポケットから弾薬を取り出してクリスに渡す。どうやらなんとかあったようだ。

……。

「それにしても先輩たちの装備、さすがにお粗末過ぎませんか？
いくら予想外とはいえ、私たちが行方不明になってるんですよ。も
う少し何かあると思うんですけど……」

言うまい言うまい、と我慢してたけどやっぱりダメだった。どう考
えてもおかしいもの、これは。特殊部隊を助けにくる装備ではない。

「いや、持ってきてはいたんだけど……その、へりに置きっぱなし
で」

「どうして置いてきちゃうんですか……」

行方不明の特殊部隊、暗くて深い森、怪しげな洋館。

これだけの不安要素があつて、なぜ……！

クリスはバツが悪そうにしているだけだったが、その答えをジルが
耳打ちしてくれた。

「隊長の命令だったのよ……」

……命令？

持ってきた武器を置いていけなんて命令があるのか？

隊長に詰め寄ろうかどうか考えていると、ちよつとどこかからグレ
ネードランチャーの発射が聞こえた。

「なんだ？」

その隊長が訊く。

「あ、フォレスト先輩ですね。たぶん大丈夫だと思いますよ」

「こんな状況でそんなことを言えるなんてな。伊達に一日過ごしてないか」

あれ、やんわり怒られた。

たしかに状況を考えれば、私が横着しているな。

「……わかりました。私が確認に行きます」

「私も一緒に」

ジルが挙手。

ここは女同士でつてところだろうか。

「了解。我々はここを確保しておく」

サングラスをくいとあげるウエスカー隊長。

……。

男性陣と別れを告げて、私とジルで銃声の調査へ向かった。

S u r v i v e y o u r s e l f a n d S e a r c h f o u r t h e

ご意見、ご感想、アドバイス等お待ちしております。

玄関から見て左手のドアは食堂に通じていた。広々とした空間の真ん中に長テーブルがあり、上座の背後には煌々と灯る暖炉がある。二階は吹き抜けになっていて、囲うように通る通路から二体ほどゾンビが覗き込んでいた。手すりが高いために、落ちてくることはなさそうだから、とりあえずのところ無視しておこう。

大きな柱時計の振り子が鳴らす不気味な音が響いている。

「準備はいい？」

「もちろんです」

食堂には入ってきた扉のほかには一つしかなかった。私の聴覚と勘が正しければ、この向こうから銃声は聞こえてきたはずだ。

ジルは、突入体勢の私の背後で一步退いたところに構えていた。一度目で合図したときに、口元を歪めて不敵に微笑んでみせたあたり、お手並み拝見って感じなんだろう。何を期待しているのやら。

「……………すう」

とても新鮮とは言えない空気を取り入れ、改めて吐き出す。

何回やってもこの瞬間だけは落ち着かないなあ。

ん？

「……………スト！ ……だ！」

向こうから声がつ！

まずい！ 咄嗟に扉を蹴破って飛び込む

！

「あ！ おまつ、バカやろう！」

左にフォレストがつてええええ右肩に物凄い力があああ！！

「くあッ！ な、なんっ！？」

ゾンビ！

しまっ 喰われる！

！！

「これが……………ゾンビ、ね」

轟音と共に激痛が急速に遠退いていった。

私を抱きよせて今にも喰らわんとしていたゾンビだが、ジルに脳髓を吹き飛ばされたため、力なく私の胸にもたれかかってきた。

さすがに気持ち悪いので突き放すと、そのまま背後に倒れ、衝撃で腐っていた首がもげた。ごろごろと転がって廊下の壁で止まった。

……………。

「助かった……。ジルさん、ありがとうございました」
「危うく死んじゃうところだったね」

きんきんする耳にうつすらと聞こえてくる。

ジルは優しく微笑んでくれるが、その笑みにはやはりどこか翳りがあつた。

「まったくだ。射線に入るんじゃないって言ってるだろ」

半ば呆れた様子のフォレストの隣りに、同隊のケネス・サリバンがいた。

目が合う。一言挨拶すると、彼は軽く手をあげて応えた。

無愛想な返事だが、これが彼の流儀らしい。

S・T・A・R・S内唯一の黒人隊員にして、最年長の彼は、やはり私たち若手の隊員とはもちろん、ベテラン連や隊長らともどこか違う、落ちついた、悟りきつたような物腰がある。あまり喋ったことはないが、彼が無口なだけであつて、別に嫌われているわけではない……はず。

ポジションはポイントマンで、危険な現場に先頭に立って対処し、偵察、制圧といったアクティブな任務の要となる役どころを担っている。そのため装備は火力があり、かつ敏捷性を損なわないように、薄い防弾ジャケットとお手製の軽量化アサルトライフルのみとノーマルと言えそうなのだが、長年の現場生活から見出した自信のようなものが溢れている。

しかしさすがに歳のためか、在りし日のキレがなくなって衰えを感じている、そろそろ潮時だろうか、とエンリコ隊長に洩らしていた

らしい。

私からすれば、まだまだ現役ですよ、としか言えないくらいなんだけど、……そりゃそうか。

ちなみに趣味は園芸と犬の調教。

一見かわいらしく思えるけど、その実は化学兵器の研究とかなんとか。本当かよ。

……。

「よおジル。お前がレベツカといるってことはアルファチームが到着したってことだよな」

フォレストがこちらに寄ってくる。その後ろにケネスが続く。

「ええ、報告はこの娘からされてるわ。大変なことになってるのね」

「ああ、正直逃げ出したいところだ……」

廊下の向かい側、フォレストたちがいた場所に一つ、焼死体が転がっている。

「先輩方は、ここで何をしていたんですか？」

「そのこのテイルームを物色していたところを背後からゾンビに襲われてな。フォレストに助けもらった」

おお。フォレストに向かって言ったのに、ケネスが応えた。……いや、別にいいんだけど、そんなことが今までなかっただけに、驚いた。

「はあ、そうなんですか。ケネス先輩、救われましたね」

若手に借りつくっちゃいましたね、という意味を込めてニヤニヤしていたら、お前も同じようなもんだろ、というニュアンスの苦笑がもれた。

しかしまさかこんなところでこんなやりとりをすることになるうとは。この人、こんな顔もできるんだ。

「……まあ、なんともなくてよかったわね。無事ならさっさとエンランスホールに戻りましょう」

「あたっ」

ケネスにお返しとして、いやいや、ここに来る前の取り決めでジルは私の援護担当になってたんですから、結果的に助けられることになったけどあれは仕事のうちですよ、みたいな不敵な顔をしていると、ジルに頭を叩かれて、話を進められる。……ちよつとした冗談じゃないですか。

「おう、ならこっちはこっちで調査進めるから、ジル、レベツカを頼んだぜ」

「了解、気をつけてね」

お荷物（私）の引き継ぎを済ませて、二人は焼死体の転がるティールームに歩み始めるが、一声あげて、フォレストが再び戻ってきた。

「うっかりしてた。これが例の墓地のキーアイテムじゃないか？」

彼が差し出した手には、三〇センチほどの弓矢があった。先端の矢じりは光沢のある石のようで、全体のバランスを考えると不自然に大きい。

「その階段を昇って少し行ったとこにいくつかあったんだけど、そいつだけ形がおかしいのを覚えててな。俺はもう少しこっちが気になるから、お前が墓地に行って確かめてくれ。悪いな」

じゃ、と一つ笑って焼死体を跨いで、その階段の方に消えてしまった。

「なに、その墓地って？」

「うーん、中庭っぽいとこなんですけどね。説明するより行った方が早いですよ」

私とジルも来た道を引き返した。

「……誰もいないね」

「……いませんね」

エントランスホールに戻ってみると、そこにはすでに誰もいなかった。

特に異変はなく、たしかに確保されていたが、肝心な隊長たちの姿が忽然と消えていた。

あちこち探してみたけれど、どうやらもうこの近くにはいないようだ。

「まったく、どうして男ってこうなのかしら」

「ジルさん、男運なさそうですものね……」

「なんですって！」

いや、べつに冗談ですよ！

だから思いっきり拳銃突き付けないでっ！

「あとね。ジル、でいいわよ。歳もちょっとしか離れてないわけだし」

「……ちよつとですか？」

「なに？ それともジル御姐さんって呼びたいわけ？ どっちでもいいのよ、私わね！」

「ジル！ ジル、やめてー！ 安全装置外れてるからっ！ 撃鉄起きてるからッ！」

め、目がマジだよ！ この人っ！

「いいわ。さつさと墓地に行きましょう」

「そ、それはお前を殺して埋めちまうぞっっていう比喻か何かですか？」

「早くしなさい」

案内して、と歩き出した彼女の前に慌てて出るが、背中を任せて大丈夫なんだろうか……？

……。

正面階段の踊り場の扉を通り、暗い階段を降って、中庭に出た。涼

しい風が頬を撫でる。

柵の向こうの墓石を見据えながら、階段を折り返して、例の石壁の前に来る。

壁にはたしかにフォレストがくれた弓矢と同じ形の型が彫られている。しかし矢じりの部分はぴったりなのだが、どうも節の部分がまったく合っていない。現物のが長すぎる。

「……はまりません」

「フォレストが間違えたんじゃないの？ どれどれ、ちょっと貸して」

弓矢を奪い取って、あれやこれやと色んな方向から眺めてみたり、今度は石板のそこら中を撫で回してみたりして、ついに何かに気付いたのか矢じりの部分を握って、力一杯引っ張った。二、三回試していると、節が矢じりから綺麗に抜けてしまった。

「だ、大丈夫ですか？」

壊れちゃったのでは……？

「よし、で、これをと！」

矢じりの部分を石板にはめ込み、節の部分はそこらに投げ捨てる。

……この人は。

しばらく何も起こらなかった。

しかし次の瞬間、地を揺るがしながら目の前の石壁が持ち上がり、中から新たに階段が現れた。どうやらシルの考えは当たっていたよ

うだ。

「さあ、行こう」

先立って降っていくジルの背中を追いかけて、暗く埃っぽい階段を降りた。

S u r v i v e y o u r s e l f a n d S e a r c h f o u r t h e

ご意見、ご感想、アドバイス等お待ちしております。

洞穴全面にレンガが敷き詰められ、薄暗い空間にランプの灯火がゆらゆらと燃えていた。まるで石窯の中に入ってしまったかのようである。

入口傍の入って左側の壁には四つばかり浮き出るように人の顔を模した粘土が引っ付いている。右側の壁は一部が鉄格子で、その中で巨大な歯車や滑車がひとしきり音をたてて働いているのを見ることが出来る。何かの動力源なのだろうか。

さらに洞穴最奥部の天井から棺桶がぶら下がっている。長方形の四頂点にそれぞれ鎖が結びつき、見るからに磔そのものだ。

……どこかの教会の地下で壁を埋め尽くすほどのミイラを吊るして保管しているところがあった気がするが、それにしたってそれなりの敬意を払ってそうしていたと思う。しかしこのそれには敬意なんてものは当然感じられず、むしろ晒しものにされているのに近い。この光景、この有り様はあまりに不気味、惨過ぎると思う。

まあそういうのを抜きにしても、まさか本当にただで晒しものになっているわけではないだろうから、この先のことを考えるとやっぱり憂鬱だ。

「また謎解きですよね……」

「今のところどうしようもなさそうね。引き返しましょう」

しばらく揺れる棺桶を無言で見つめてから、どうしようもなくなっ

て、仕方なく引き返すことにする。

入口まで戻って一応四つの顔をもう一度注意して眺める。

「あ、ちょっと待ってください。この人の顔の下に何か文字が彫られて……えっと、？口を封じられた仮面？ ……仮面ですって」「 ……それらしいものがどこかにあるってことね。ちょっと探してみる？」

洞穴内を隈無く探してみたところ、ちょうど棺桶の真下の壁に半ば同化しているような形で本が埋め込まれていた。

「？呪いの書？って、また不吉なタイトルですね……。開きたくないです」

「開きなさい」

『呪いの書

四つの仮面、すなわち

口無き仮面 鼻無き仮面 目無き仮面 三つ全て無き仮面

全ての仮面が揃う時、災いは再び蘇る 』

……。

「この洞穴の状況説明のようね。なんてわかりやすいかしら」

「なんか不気味さの押し売りって感じです……」

ジルの皮肉はおいといて、たしかに洞穴の異常性と棺桶の中身の危険性については改めて理解できたが、何分文章の抽象度が高いため、何がどう危険なのかは伝わってこない。

この点でわかるのは、この？呪いの書？は封印を解く手掛かりとして書かれたのではなく、封印状態を維持するために書かれたのだろ

う。解くことを想定されていないために抽象度が高く、維持を目的としているから危険性だけを伝える詩的な文章なのだ。

なんにせよ私たちの探索においては、あまり役に立っていない。大したヒントにもならないし、棺桶が封印であるならば封印を解く目的の障害にもなるはずがないわけで。

「もちろん四つの仮面を探しますよね」
「当然」

その辺りは、S・T・A・R・Sにあつては論ずるに値しないって領分だろう。

謎があれば解いて、敵がいれば駆逐する。疑わしきは罰せよってか。

「とりあえず洋館に戻らないと。ここに居てももう情報はないわ」
「そうしましょうか」

……。

来た道に戻って、エントランスホールに出る。相変わらず誰もいない。

「私は向こうを探すから、レベッカはあっちね」

「え？ 分かれるんですか？」

「みんなに四つの仮面のこと知らせなくちゃいけないでしょ。手分けした方がよさそうじゃない」

「……それもそうね」

「何かあったら、またここで落ち合いましょ」

そこでジルは食堂の方に、私は反対側に行くことに決めて、それぞれ分かれた。

一階から調査を始めることにする。

食堂の反対側のドアを開けると、数々の美術品が並ぶ部屋に出た。

部屋の中央に水汲み壺を掲げた女性の像が堂々と鎮座している。

壁の絵画を眺める。

脇の方で大きな音がしたと思ったら、向こう二つの扉の開きっぱなしになっていた方からゾンビが現れ、立て掛けてあった三脚につまづいて情けなく倒れていた。

間抜けなやつもいたもんだ、と呆れながら無抵抗にひれ伏したゾンビの脳天を撃ち抜いてから、こいつが出てきた方の通路に入った。

L字の通路はすぐそこで行き止まりだった。画材道具置き場らしい。特に使えるものはなかった。

戻って、もう一方の扉を慎重に開けた。

白いL字廊下の角を曲がって、突き当たりの扉を開けようとしたときだ。

カリン

「え?」

咄嗟にしゃがんだ。

すぐ右手の窓ガラスが激しく飛び散り、頭上を何かが通過！

そのまま勢いのあまり廊下の壁に激突し、自ら剥き出しだった脳髓を潰していた。

「ゾンビ犬っ！」

そして背後でもう一度窓ガラスが割れた。

廊下の向こう側を疾走するゾンビ犬が、焦る目と心に、わりにゆっくり映る。

逃げるか戦うか！

一瞬のうちに、天秤に掛ける。

逃げた方が無難、そして逃げることもできる。

しかし逃げた場合、次にここを通ろうとした仲間があっという間に喰われてしまう結果になりかねない。

やはりここは戦う以外に逃げ場はない！

覚悟を決めて、こちらもゾンビ犬に向かって駆ける。といっても二、三歩行ったところで、向こうが飛び掛かってきたので、掻い潜るようにスライディングで躲し、そのまま身を翻して、腹這いで照準を合わせ、撃つ。

腹部に着弾したらしく、甲高い声をあげて倒れた。

その隙にこちらはすばやく立ち上がり、体勢を整える。

致命傷にはならなかったようで、足を引きずりながら、立ち上がった。瞬間を逃すはずもなく、一連の動作の中で、ほんの僅かだけ止まったその時に、引き金を引いた。

……。

「……………危なかつたあ」

まったく、これからは窓の外も気をつけないとダメだなあ。

今度こそ突き当たりの扉を抜ける。

美術品に囲われた大理石の床に始まり、白いカーペットの廊下の次は、板張りの廊下か。ぶつ切りというか、統一感のない内装ね。私にはわからないなあ。

部屋の都合上か、狭く入りくんだ構造になっている廊下なので、ゾンビ犬が現れたら嫌だなあ、としばらく窓の外を眺めていたが、今回は大丈夫らしい。

何回か角を曲がったところの内側、この廊下を複雑にさせているであろう部屋に繋がる扉に入ることにする。その向かい側にもう一つ扉はあるが、どう見てもこちらの方が行き止まりは近そうだ。わからないけどね。

……。

「なんて高い天井なの……」

入った部屋は正方形の無駄に高い天井があるだけだった。

また何か仕掛けがあるのだろうか。

向かい側にあつた扉を開ける。

何故ここに、と思わせるような応接室だ。デスク、テーブルを挟んで両側にソファ、観葉植物。黒スーツにサングラスというビジネスマフィアが似合いそうな質素かつ敵かなそれだ。

「いったいどんな造りなのよ。この洋館は……って、あーっ！」

あの机の後ろにあるのは！

ヒルの化け物に壊されてこのかた忘れもしない、恋焦がれ夢にまで魅た！

「やったね！ ショットガンー！」

見世物のようにウィンチエスターM1897が壁に掛けられているではないか！

手に取る。

ああ、忘れはしないこの重さ、それに質感！

あの場所で失われたモスバーグM500の代わりになれるよ、きみなら！

そして私に足りない火力と制圧力を補ってくれっ！

さあ、もうこの部屋には用はない。

さっさと調査の続きをしなければ！

……。

扉を開けて、天井の高い部屋を通って廊下に出る　いや、出れない。ドアノブが回らない。

「どうして閉まって　ッ!？」

異変に気がついたのは、ようやくその時だった。

高かったはずの天井が徐々に低くなっている！

はらはらと土埃が落ちてくる。

急いで応接室の扉に駆け寄るが　。

「なっ、なんでッ!？」

当然のようにドアノブが回らない。閉じ込められた。

ショットガンか。

こいつが畏だったのか！

「だ、誰か！」

廊下側のドアを叩く。

助けを求める他に私に残された道はない。

すでに天井は私の頭のすぐ上にまで迫っている。

うっかりシヨットガンごときに浮かれてしまったのが、すべての終わりだったのか。

私がここまで生き残ってこれたのは、まさに幸運としか言い様のないものだったが、それもここで尽きたのか。

「誰かいないのっ!？」

思えば私の幸運は私自身のもではなく、出会ったパートナーのお零れだったような感じもする。

私が出会う人はみんな、強く、頼もしく、何よりツイていた。

私は彼らに助けられた。

私一人では、はじめから到底この悪夢と戦うことなんてできるはずがなかったし、それが何であるか判別つく前に死んでいたに違いない。

思い返さなくても、いくらだって死にそんな場面が浮かんでくる。

……。

ここまで生き残れたのは、パートナーがいたからだ。

人任せ、なんだろうか？

私も彼らの頼りになっていただろうか？

わからない。

そして笑えるけど。

でも。

ビリーも、フォレストも、ジルも、誰も、ここにはいない。

「た、助けて……！」

天井は無情にも下降を続け、もう立っているのも難しいほどの高さになってしまった。

……ダメか。

まあ、ゾンビに喰われるよりは、マシかもね……。

それでも痛いだろうなあ……。

「……………」

でも、やっぱり。

私はパートナーを見つけることが出来た。

それって、私にも僅かながらに幸運が遇ったってことじゃないのかなあ。

……。

「誰か中にいるのかっ!」

「ッ! 私よ! レベツカ! 扉が開かないの!」

「下がってる!」

銃声が二度、三度と響いた直後、扉は外側に開き、ごっごっした大きな手が私の腕を掴み、引っ張り出した。

後ろで天井と床が接着した音を聞いた。

「た、助かった……………」

「もう少しでサンドウィッチができるところだったな」

「ありがとうございます。…………先輩」

「先輩って柄じゃないわな。バリーでいいよ。みんなもそう呼んでる」

S u r v i v e y o u r s e l f a n d S e a r c h f o u r t h e

ご意見、ご感想、アドバイス等お待ちしております。

さすがに疲れた。一息つけるような場所を探していたところ、下がり天井の近く、階段の間の脇にちょうどよさそうな物置を見つけた。狭い部屋に電灯はなく、消えかけのランプによって殺風景な様相を醸るげに映し出されている。

見たところ、ロープやら木材やら液体燃料やらが適当に投げ入れられた至って普通な物置なのだが、何故かタイプライターがあり、床に散らばった真つ白な紙に埃が積もっている。そこからしばらくこの部屋の出入りがなかったことが窺える。

危険はなさそうだと判断して、隅にあった大きなボックスに腰をおろす。

はぁ、と物理的にも精神的にも背負っていたものを一時的に放り出して楽にする。とはいえ扉の鍵が閉まらないということもあって全部を投げ出すわけにもいかない。心の一部は緊張を緩めないようにしておく。

「あーあ、疲れたあ。それにしても、下がり天井にはやられたわ…」

手元に冷たい鉄で型取られた恐ろしいデスマスクがある。裏側に彫られた？口を封じられた仮面？という文字通り、唇が切開されたように歯が剥き出した。

これが例の洞穴のキーアイテムなのだろう。

気持ち悪い仮面といい、この洋館の内装や仕掛けといい、考えた奴は趣味が悪い。

……。

下がり天井のトラップから救出された後、少しだけバリーと立ち話をした。最初の方は助けてくれたことに対する感謝を何度も繰り返して、何があつたのか説明を求められてそれに勢いよく応えていただけだったが、ふと冷静になってくると一つ疑問を思い出した。

「なんでエントランスホールからいなくなつたんですか？」

女性陣がグレネードランチャーの銃声の調査に向かったとき、男性陣はホールを確保しておく命令だったはずだ。しかし私とジルがホールに戻ったときには、ウエスカー、クリス、バリーの誰一人として残っていなかった。命令違反と言つつもりはないが、一言あつてもいいと思う。

「命令だよ。ウエスカーのな」

「めいれい？」

「先に行つてろつて言われたんだよ。ここは自分だけで大丈夫だつてな」

あー、まあたしかに、ただでさえ人数の少ない特殊部隊で、男が三人も待機命令つても非効率だよなあ。それで部下を先に行かせた方がいいけど、どこから湧いて出てきた化け物に対処しきれなくなつて逃げ出した。無理矢理、道理をつけるとしたらそんなところね。

エントランスホールにそんな形跡は一切なかったけど。

「でもウエスカー隊長もいませんでしたよ」

「さあな。大方、ゾンビに襲われてどこかに隠れてたんだろ。まあ、奴のことだ。どこか別のところで涼しい顔してるよ」

幸い、彼らがいなくなっても、私もジルも問題なくその後の探索を続けられたし、ウエスカー隊長も絶対死にそうにない人だから安心してもいいんだろうけど……、そういうことじゃないと思うんだけどな。

今回のことに加え、ヘリに装備を置いてきた件も合わせて考えると、あの人、絶対判断ミスしてるというか、作戦が裏目に出てるような気がするなあ。

だいたいあのサングラスはなんなんだ。こんな薄暗い館でよく掛けていられるよ。それに生まれたときから掛けてるんじゃないかってくらい似合ってるし……。

「……隊長っていったい何者なんだろ」

「何者って言うത്？」

あ、やばっ、心の声が洩れた。

バリーが訝しげに見つめる。

完全に怪しまれる独り言だった。付き合いの長さから言えば、当然向こうのが信用度も高いわけで、こんな状況下で迂闊な答えでも出したら、誰かのように手錠でもされてしまつかもしれない。

「あ、いや、大したことじゃないんですけど、ほら、あのサンングラス。あんまり特殊部隊っぽくないというか、妙に似合ってますから……」

しどろもどろだ。

「奴は生まれつき目が悪いらしいんだ。いや、悪くはないんだけど、その、色がな」

「ああ、なるほど。そういうことですか」

きつとアルビノかなにかなのdarou。そういうえば金髪だし肌も異様に白いから、アルビノの症状と言えなくもなくもない。

まあなんにせよ大したことじゃないことに変わりはないが、本人が気にしているかもしれないからそっとしておこう。

……。

「そついえば仮面って知りませんか？」

一応疑いの眼差しは退けられたようだし、話を引つ張るとまたボロが出そうなので、唐突に矛先を情報交換に向けてしまおう。

「仮面って、例えばデスマスクみたいなやつか？」

「デスマスクかどうかわかりませんが、とにかく仮面です」

「？口を封じられた仮面？ってのならあるよ」

「えー！」

それがまさにそうなんです、と慌てて叫ぶと、彼はおもむろに背中を向け、ベルトにくくりつけられた仮面と呼ぶにはあまりに恐ろしいデスマスクを指し示した。その姿があたかも浴衣の帯に天狗のお

面をくくったお茶目なジャパニーズを連想させ、どこか間が抜けている。

両目を貫いていた紐の結び目をほどいて、私にくれる。

「さっきこの先にある絵画の部屋でステンドグラスのパズルを解いたら出てきたんだ。いったいなんなんだ、それは」

「私も詳しくはわからないんですが、デスマスクが四つあるようなんです。それをエントランスホールの先の中庭にある地下墓地に持つていくと、きつと何かが起こります」

「なるほど、あと三つあるわけだな。とりあえずそれはお前が持つてくれ」

「え？」

「さっき見た通り、荷物が多すぎて持ち運びが面倒なんだ。シヨットガンの弾もやるから頼んだ」

……。

いやはや、とりあえず情報を与えておこうと思って言っただけなのに、まさか現物をすでに入手しているとは。

さすがS・T・A・R・S、さすがアルファチームといったところなのだろうか。

いい加減、不気味なデスマスクと見つめ合うのも飽きてきたので、ウエストポーチに無理矢理ねじ込んだ。バリーからつい受け取ってしまったが、私もけっこう余裕がなくなってきた。

立ち上がって、ふと今まで座っていたところに視線を落とす。突然不思議な感じがしてきた。

このボックス、薄汚い外装だけど、よく見みると何か宝箱染みたオーラを醸してない？

何かに操られたように重い蓋を押し開ける。腐りかけの蝶番が歯がゆい音をたてた。

「……………お！ おお！」

中からきらびやかな黄金の輝きを放ってはいないけれど、今なによりも必要としている医療品や弾薬の数々が出てきた。また荷物が重くなるけど、持てないこともないし、持っていて困るものでもない。なのでありがたく頂戴しておく。

持てるだけポーチに詰め込んで、僅かに残っているものの中で使えるものを探していると、ボックスの底に隠しているかのようにちいさく折り畳まれた数枚のファイルが出てきた。紙はまだ新しい。

「なんだこれ」

手に取って、ランプの灯りの下でページを繰る。

『 死体処理に関する諸注意

あの化け物どもに関する真実が判った。

奴らは死体になっても復活するのだ。

ただ、対処方法がないわけではない。奴らを復活させない方法は2つある。

1 死体を燃やす

2 頭部の破壊

生きる意志のある者の為に、この洋館の1Fにオイルを用意しておいた。それぞれで、必要なだけ持って行って生き残る道具として使って欲しい

追伸：着火する道具くらいは、自分達でなんとかしてくれ 』

「おいおい……これは……」

ゾンビの本領発揮ってところか。

倒しても倒しても時間が経てば生き返るってことかよう。泣けてくるなあ。

燃料はたしかに置いてあるけど、私、ライターもマッチも持ってないんだよ。火炎壺もあっちの施設で全部使いきっちゃったし、そもそもライターはビリーのやつを借りてただけだからなあ。

方法一はこれでバツ、と。

方法二は微妙なところだ。

今までゾンビなら頭部に一発喰らわせて倒してきたけど……。

この筆者の気が利かないところは、頭部の破壊ってどこまで破壊すればいいのか書いてないことだ。

傷ひとつ付けばいいのか、脳幹を根こそぎ吹き飛ばさなきゃいけないのか、細胞レベルですりつぶさなきゃいけないのか。

私が倒してきたゾンビはかろうじて脳幹を貫通している程度だろう。それ以上だったらやばいなあ……。

うーん、どうなんだろうか。

だいたい、この文面を見る限り、筆者はこちらが方法一を使うことを前提に語っている。灯油の準備はありがたいけど、だったら火種の用意も頼むよ、本当に。

……。

「フォレスト先輩の攻め方は当たってたのか。いいよなあ、焼夷弾……まあいいか。ゾンビが何回生き返ったところで雑魚であることに変わりはないわけだしね。弾は余分に使うけど、気をつけてれば死ぬことはないよね」

無い物ねだりをしたとこで物事は始まらない。受け入れるというよりは、諦めて探索に戻るとしますか。

この物置の前、階段の間が折り返し地点だと勝手に決めつけて、二階に行ってみようかな。

S u r v i v e y o u r s e l f a n d S e a r c h f o u r t h e

ご意見、ご感想、アドバイス等お待ちしております。

黒々と鈍い光沢を放つ鉄板の扉。

二階に上がって、来た道に戻るようにエントランスホール二階を指し、ちょうどU字型の廊下の中ごろを歩いていたところ、右手にその姿を見せた。

傷、汚れだらけの周囲の様子と違ってかわって、まるで核シェルターのような何者も寄せ付けない堂々とした物腰だ。これだけ立派なのだから、当然中に特別なものが隠されていると考えられるだけに、ベレッタを握る手にも力が入る。

両開きの扉の片方を力を込めて押してみると、重たいそれはゆっくりした調子で開いた。鍵は掛かっていなかった。

中に入る前に一応廊下を改めて見回す。
戻ろうとしていた先の突き当たりには扉が見える。木製の扉だ。
その目の前に一体ゾンビが倒れている。遠目には異常は見当たらない。誰かここを通ったときに倒したのだろう。焼死体ではないから、フォレストではないな。

それ以外は問題なくクリアされている。

中に入った。

「うわぁお……」

後ろ手に扉を寄りかかるようにして閉めながら、部屋のあまりの荘厳さに声が洩れてしまう。

内装自体は煤けたコンクリートの打ちっぱなしで何ということもないのだが、部屋の両サイドにあたかも王の帰還を待ち受けているかのように、冷たくそして力強く中世騎士の甲冑コレクションが立ち並び、特にそういったものに興味のない私でも、目の前にしてみるとやはり圧倒されてしまうものがある。

「すごいな……」

しかし考えてみれば、この奇怪な洋館で、まさか本当にただのコレクションというわけではないだろう。一度疑いのフィルターをかけてしまうと、今まで迎えられる王様だった気分が敵勢の軍門をくぐる捕虜のように感じられる。下がり天井の失敗から思考が極端に慎重になっているようだ。

注意深く一つひとつ眺めたり、小突いたり、目の部分から中を覗き見たりしたが、不審はない。

槍の騎士、剣の騎士、盾の騎士、斧の騎士。

それぞれの立ち位置を結んだら、ちょうど正方形になる。たくさん並ぶ甲冑の中で武器を手に行っているのはこいつらだけなので、そういう括りができる。

とって、だからなんだという話になるのだが、この甲冑に意味はないのか？

次に扉正面の壁に視線を移す。

騎士の絵が四枚掛かっている。その騎士が同じくそれぞれ槍、剣、

盾、斧を持っているあたり、やっぱり何か意味があるんだと思うけどなあ。

絵の下に窪みがあった。

窪み底部はこちらを向くように斜めになっていて、何か四角い箱のようなものはまっていたと思われる穴がある。

そこがまるつきり空だということを見ると、この部屋の仕掛けはすでに誰かが解いているのだろう。鍵も掛かってなかったし、ゾンビも死んでいたし、そういうことなのか。

……。

疑問を残してくれる部屋だが、やることが見当たらない以上留まっているのも時間の無駄なので、諦めよう。

不動の騎士たちに別れを告げて、重い扉に手を掛け、引っ張る。

押し開けるのは簡単だったけど引っ張るのは大変だなあなんて考えつつ、どうにか弾みをつけて、僅かばかり隙間を空けたときだ。

風が掠めた。

何があったのか、一瞬のうちに理解するのは不可能だった。

頬に熱い血の流れを感じる。

視界には激しくたわむ木の枝のような？腕？が見えている。

だが、それが何を意味するのかよくわからなかった。

「……………！……………ツカ！ レズツカ！」
「……………」

生きてる……………の？

「ようやく起きたか。心配したぜ」

「リチャード……………？」

「ああ、そうだよ。立てるか？」

「ええ……………」

地に足が着いていないというか、よろけているとリチャードが支えてくれた。

「しっかりしろよ」

「……………すひません」

場所は変わらず甲冑の間のような。

でも扉は閉まっていて、赤黒い腕もなくなっている。

……………っというか。

「なんら喋りにくひんですけど……………」

「その怪我じゃあな」

顔まわりを触ってみる。

首に包帯、右頬にでっかいガーゼ、額に包帯代わりの赤いバンダナがあてがわれていた。

口の中も切れているのか血の味がする。

「傷はまあ深くはないなって感じた。手当てするときに、腰のポーチ、勝手に漁らせてもらったからな」

救急スプレーが一本、調合ハーブの包み紙が一つ、床に転がっている。どちらも私が持っていたものだ。

「ありがとうございます……」

「大丈夫か？ とにかく移動しよう。また奴が生き返りでもしたら嫌だからな」

「やつ？」

「お前が襲われたゾンビだよ。一度俺が廊下の向こうで倒したんだけどな。そいつが今いなくてこいつがいるから、たぶんそいつなんだよ」

「……ちなみにどうやって倒しました？」

「角から急に現れたから驚いちまってな。腹にフルオートでぶち込んだら動かなくなったから倒したと思ってたんだけど……、甘かったみたいだな。悪かった」

「いえ、そうじゃないんです。実は……」

死体の処理に関する。。。

あれが復活したゾンビ……。

あまりに狂暴。あまりに凶悪。

あれは食欲のために人を貪るゾンビなんかじゃない。

単純な暴力だ。

自分を殺した人間を殺すために蘇った死兵だ。

……。

そして私はそいつに傷つけられてしまった。

この先もしかすると私も……。

考えたくはない。

しかし考えないわけにはいかない。

……。

……もしも。

もしも私がゾンビになってしまうのなら。

そうなる前に。

自分で頭を吹き飛ばすほかあるまい。

U字廊下から繋がる柱のあるF字型の廊下。二人で私の回復を待つ

名目で立ち話をしている。

「なんで赤いバンダナなんか持ってんだ？ 勝手に使っちゃったけど……」

「包帯代わりです。だからこれであってますよ」

「代わりって……」

「割り当てられた医薬品の中になかったんですよ。まったく、困りますよね。出発前でしたから、慌ててこれを持ってきたんです、しようがなくてすけど。……高かったですよ、これ」

「それはそれは、うちの署はケチだからな。出し惜しみしたんだろ」

包帯ケチりますかね普通、とわりと本気で愚痴る私を見て、彼は他人事のように笑った。

リチャード・エイケン。

私の一番近い上司とでも言うべきか、年齢が近いっただけで新人のお守り役という貧乏くじを引かされてしまった悲しき二三歳。

サッパリした金色の短髪に、ほんの少し色が入った肌で、なかなか人のよさそうな顔つきなのだが、若干、この若さにしては目つきが悪す……いや、鋭すぎる眼光を持っていて凄みがある。それは生まれつきのものというよりは、怒りのあまり一夜のうちに髪が真っ白になってしまふのと同じように、何かの拍子に深く刻み込まれてしまったような、そんな類いのものにも思われる。

まあ実際、本人からではないが噂話に聞く限り、過去に相当な事件があったそう。詳しくは知らないけれど。

とはいえ、これまでの言動の中に、人間不信自殺願望とか、ある個

人に激しい復讐の念を抱いているとか、全人類を恨んでるとか、当然そんな兆候は見られない。一般的に言えば、少し影がある気さくでユーモアに溢れる好青年って感じだろう。

ポジションはバックアップマンということで、前衛の援護を主にし、彼の場合、通信も担当している。

装備しているアサルトショットガン　ベネリM3は速射性に優れ、中近距離においては絶大な威力を誇る。また汎用性が高く、壁抜きや扉の破壊にも使える。人相手には使いたくない武器だが、敵が化け物ならこれ以上頼もしいものもないだろう。

……。

「それにしても生きてたんですね。なかなか会えないから心配しましたよ」

「なんとかな。大変だったんだぞ。ヘリを降りてすぐお前を見失っちゃまうし、そのせいで隊長に怒られるし、お前を探しているうちに化け物に襲われてチームが散り散りになるし……」

「え、えーと、それはつまりほとんど私のせいということに?」

「まったくだ。何が心配してましただ。心配させやがって!」

冗談めかして言ってるから、本気で怒ってるわけでもないんだろうけど、すみませんー、と軽く謝っておく。

「でも見失ったのは私のせいだけじゃないような気がするんですが……。一緒に行動しろって命令もなかったわけですし」

「お前なあ。たしかに見失ったのは俺のせいだよ。それに命令もなかった。だけど俺がお前の指導役を任されてるのは知ってるだろ?」

それはつまり任務ではサポートしろってことだろうが。まして初任務で単独行動させて怪我でもしてみろ、俺の管理責任が云々って話になるじゃないか。そこは察してくれるべきじゃないのか？」

「それは無茶です……」

……。

「ところで真面目な話、この事件、近頃多発している猟奇殺人事件に……」

「ああ、間違いなく関係あるだろうな」

直接結びつくような証拠品は発見されていないけど、人が食い殺されるっていう共通点がある以上、その考えは揺るがない。

「ただの事件……ではない、もっと深い事情がありそうですね……」

「そうだなあ。まさか偶然ってことでもないだろう……」

「それにフォレスト先輩は、S・T・A・R・Sは利用されているとも……、だとしたらエドワードは……」

「ちよつと待て」

一呼吸おく。

「そんなこと今考えてどうする」

「どうするって……！」

「いいか！ たしかにそれは重要だ。義務でもある。だが……俺たちが生きて帰らなきゃ意味ないんだ。余計な心配しないで、目の前のことに集中しろ」

「わかってますけど、でも……」

「死ぬときは死ぬ。それが俺たちの仕事だ」

「……………」

「自分や仲間の死を前にして、不安になるな、悲しむな、割り切れ、
って言ってるわけじゃない。俺たちは戦闘マシンでもゾンビでもな
いんだ。……意思を持った弱い人間だ。どうにか生きのびて、そこ
からようやく何かが始められるようになるんだろ？　こんな状況で
何もかも受け入れている余裕はないはずだ」

「……」
「難しい感情は保留しろ、少ない情報であれこれ類推するな、問題は先送りにしろ、そういうことだ」

「……」
「そんな顔するな。難しい話じゃねえよ。……S・T・A・R・S
に入ったときに覚悟を、命の重さってやつを理解したはずだ。今の
気持ち……とりあえず心の奥にそっとしておけ。大丈夫、そんなに
簡単になくなったりはしないさ……」

言い終わって、彼は眩しそうに暗い天井を見つめた。

……。

しばらくして、視線を私に戻して肩を竦める。

「今は多くの情報を集めることに専念して、難しいことは後で考え
ようぜ。始末書でも書きながらな」

率直で前向きな瞳が私を見つめる。

訊いてもいいのか、判断に迷う。

私のずるい心が揺れる。

困らせるだけだとはわかっている。でも……。

「リチャード！　もしも私が　」

その先が彼の耳に届くことはなかったと思う。

言えなかったのではない。私はたしかに訊くべきではないことを口にした。

（私の行く末を知る何者かが覆い隠してくれた。そう受け取っておくことにしよう。
いずれの未来が待っているとしても、それはやはり私の未来だ。自分でどうにかするべきだと教えてくれたかのような、そんなタイミングだった。）

決して小さくない叫び声を掻き消す大音量が通過した。館全体を揺るがすような地響きを伴って。

「奴さんのお出ましのようだな。大丈夫か。いけるな？」

「……………はい」

「俺が今度こそサポートしてやる。……………心配するな。お前を死なせたりはしない。……………ご不満か？」

「お願いします。……………ただ、いつまでも足を引っ張るだけの私だと思わないでくださいね」

「おうおう。期待してるぜ」

轟音がしたのは奥の部屋だ。何か大きなものが崩れ落ちるときのように、館全体を揺るがすほどの質量を伴った音だった。これが化け物の類いのせいだとすると相当な強敵かもしれない。

ベレッタをベルトのホルスターに仕舞う。得物をショットガンに持ち替えて、リチャードの後ろに続いてカビだらけの扉をくぐる。

「……気い抜くなよ」

目標はすぐに見つからなかった。薄暗い部屋はかえって不自然なくらい静けさを取り戻していた。

高い天井が傾斜になっているからここは屋根裏部屋になるのか。湿っているのか乾燥しているのかよくわからないカビっぽい空気が充満し、あちらこちらに蜘蛛の巣が張り巡らせられ、壁や中央の柱には白い斑点ができてしまっている。とても人間が暮らせる状態ではないし、がらんどろとしていたりあたり物置として活用していた様子もない。船の空気溜めの部屋と同じように、建てられた当初から放置されているのかもしれない。

それにしても壁に取り付けられた小さなガス灯のいくつかは、そんな推測はまるで間違ったものとするかのようになり、白々とした光を放ち、部屋を最低限視界が利く程度に照らし続けている。今のところ、生存者がいないこの洋館で光熱の管理やエネルギー供給の問題をどうやってクリアしているのだろうか。不思議というか不気味。

……。

「集中しろ、レベッカ」

「了解」

ゆっくりした歩調で奥に進む。長方形に広がる空間は屋根裏部屋と
いうにはけっこう広かった。

一番奥の向かって左側の壁の木板が一際剥がれ落ち、床と接する
ところに私の腰くらいの高さの穴が開いていて、あたかも洞窟のよう
だ。壁の裏の断熱材やらコンクリートやらがバラバラと崩れて散ら
ばっている。

リチャードが慎重に近づく。私は背後を気にしつつ、それに続く。
アサルトショットガンに付属したフラッシュライトが暗い穴の中を
照らした。

「何も無しか？ ……いや、奥に何かあるな」

彼は跪いて半身を穴に入れて、手を伸ばす。その様子を後ろから覗
き見る。

彼の手先にはたしかに何かある……あれは、デスマスクか？
なんで、あんなところに。

っていうか、さらに奥にフラッシュライトを反射して黄色く光って
いるのは……？

……。

ッ！！

「リチャードっ！」

「のわッ!？」

襟を掴んで無理矢理引っ張る。彼は尻餅をついて転がり、私は反動を使って飛び退いた。

『キシヤヤヤヤヤヤヤヤヤ!!』

今まで立っていた空間が吸い込まれる。

「な、なんだ！」

「蛇です！」

バックステップで距離を取りながら、すぐさま天井近くまで持ち上がった頭部にショットガンを発射する。リチャードも慌てつつも体勢を立て直して、散弾を頭に集中させ始めるが、それでもほとんど効き目がないのか、化け物は飄々としてシユルシユル舌を鳴らしているだけだ。

横穴から現れた全長一〇メートルもあるかと思われる大蛇は、絶え間なく飛び交う鉄片の嵐をまるで意に介していない様子で、悠々とその長さに対して不恰好に太い躰を引きずる。私とリチャードの間を通り、ズルズルと扉の前まで移動し、振り向いて口腔を覗かせた。鋭い牙から伝った液がきらりと光る。

逃げ場はないぞってことか　　って！

そこに無数の鉄片が飛び込んで、あの大蛇が苦悶の表情をつ！

「頭部に弾を集める！ 特に口を開けたときがチャンスだ！ 無駄撃ちするなよ！」

「……了解」

さすがに容赦ないなあ、威嚇も満足にさせてもらえないなんてって……いや、しかし本当に口の中はダメージがあるようだな。

なんて余裕なことを考えているうちに、怒り狂った大蛇は私に向けて尻尾を振るう。それを大きく後ろに飛び退いて躲し、すぐに牽制程度に射撃を加える。

どうやらさっきのリチャードの攻撃で、大蛇は私たちを獲物としてではなく、本物の敵として認識したようだ。

頭をバネのように激しく前後に振り、寸胴とはいえ蛇らしく、こちらを喰らわんと文字通り首を突っ込んでくる。左右に展開する私たちのどちらも放っておけないらしく、頭はV字に軌道を描き、ほとんど交互に攻撃を加えている。

そんな馬鹿みたいに等間隔なタイミングでは避けるのも簡単な話で、こちらはバックステップで距離を取りながら、余裕をもって、襲いかかる口に変わり身よろしく散弾を喰わせてやる。

が。

「……効いてますか？」

「……効いてないことはないんじゃないか？」

さつきは虚を衝かれたただけだ、と言わんばかりに頭部に集中する散弾も構わず、大口を開けて向かってくる。

部屋の端まできて、そのまま二手に分かれる。大蛇は迷うことなく私の方に狙いを定めた。

向こう側からリチャードの援護はあるものの、一対一の形になって大蛇のスピードは目に見えて速くなる。

もはやバックステップで牽制射撃する余裕なんてあるはずない、っていうか！

これは、全力で、逃げないと、マジで、喰われるうっ！

「レベッカ！ こっちだ！ 戻ってこい！」

それはそうだけとできるかどうかっ！

……。

反対側の壁に到達する直前に進行方向を変えて、大蛇を四隅に誘い込む……というか追い込まれる。

向こうはというと、今まさにうさぎを巣穴に追い詰めたときの野性の恍惚を思い出したかのように、後頭部に散弾をくらいながらも口を大きく裂いて喜んでいる。

「やるしかないわね……！」

ショットガンは走っていると肩に掛けて、すでに手にはない。

今、必要ないものを持っていても邪魔なだけだ。私は次の一撃を避けることに集中する。

タイミングは向こうに合わせるしかないんだっ！

『キシアアアアアッ！』

引き上げられた首が弓のように弾かれ、迫る。

これをギリギリまで引き付けて　　ッ！

「うきやあああああ！」

牙がブーツを掠める！

左に転がるように跳んで、かろうじて攻撃を躲した。大蛇は私がいた場所の床に穴を空けて、顔をめり込ませている。

その隙に立ち上がって一目散にダッシュで逃げるが、向こうもすぐに反転し、私の後ろにつけた。

一瞬チラリと後ろを顧みる。腹這いの状態から顔を持ち上げ、蛇行しながら攻撃体勢に入っていた。尾の一部を浮かせて、今にも飛び掛かるうとしている。

……やばいな。

「避けるっ！！」

声の隙間に手榴弾のピンが抜かれる音を聞いた。

左に跳んで、無様に転がる。

「これでも喰らってる!」

バクンと音がして、私の代わりに手榴弾が喰われた。倒れている私から注意を引くためか、リチャードは執拗に銃撃を加えるがそれってやっぱり！

「リチャード!」

「はッ」

……よかった。

しかもあの攻撃でも私みたいにみつともない声をあげないわけね……。

死ねばもろともって感じて彼に飛び込んだ大蛇を、寸でのところでくぐり抜け、私の下まで駆け寄ってくる。

ほっとして再び大蛇に目をやれば、ちょうど頭部から少し奥に入った喉元が鈍い音をたてて、一瞬、膨らんだ。

『ガアアアアアアッ!』

無数の鉄片に体の中から傷つけられては、さすがの化け物でも相当なダメージのようで、狂ったようにあたり構わずのたうち回る。

「今のうちだ! 一度後退するぞ!」

暴れる尻尾に巻き込まれないように、距離を取って脇をすり抜け、扉を開けて廊下に戻り、さらに段差を降りて目の前の扉を開けて柱のあるF字型の部屋まで後退する。あの大蛇の破壊力を考えれば、

念には念を入れるべきとの判断だろうか。

しかし扉一枚、壁一枚隔てたところで、あの巨大な体躯がたてる物音が遮断されるわけもなく、恐ろしい破壊音や断末魔が、心臓の鼓動やら手汗やら、極限状態を持続させてくれる。

にしても、とりあえず第一ラウンド終了。

判定はこちらが優勢か？

「どうしますか？ やっぱり倒さないとまずいですよね」

「……ああ、そうだ……な」

……なんで私の胸に顔をうずめる？

なにしてるんですか、と彼を抱き起こし、冷めた視線でもお見舞いしてやるうかと思った。

だけど　！

「ちよっ、どうしたんですか！　しっかり呼吸してくださいよ！」

いや、呼吸だけじゃない。

目の焦点はまったく合っていないし、尋常ではなくべっとりした脂汗を流す顔は一目にもわかるほど血の気がひいて青白く、唇は紫色に変色している。

視線を下に移す。

……シャツの左脇腹あたりが黒々した血に染まっているのが嫌でも

目につく。

傷自体はそんなに深くない。攻撃を避けるときにほんのちょっと牙に引っ掻けてしまった程度の傷だ。

ただ……。

傷口の周りはすでに、シャツの上からでもわかるくらいに腫れ上がり、少し触ってみたところ、発熱しているだけでなく、朦朧としている意識にも激痛を感じるらしく、辛そうな声をあげた。

……。

これは血液系の毒による初期症状だ。奴は毒を持っていたんだ。それも相当強力な猛毒。

それに侵されているとなれば、下手に止血するわけにもいかない。

……血清。血清を持っていれば！

「ドジったな……。サポート役がこのザマだ……」

「大丈夫よ！ しっかりしてっ！」

体を支えて、慎重に横たわらせた。

これだけ広い建物なら、どこかに必ず医務室らしきものはあるだろう。そこならきっと血清があるに違いない。

でも私の探索したところにはなかった。

今から探しに行っている間は間に合うわけがない……。

「リチャード、聞いて！ 医務室がどこにあるかわかる？ 気を確かにかに！」

「う、うう……」

こんな状況で話しかけるのは酷だとわかっている……。

でも私より先に到着して、多く探索している彼ならどこにあるか知っているかもしれないから。

助けるためには、それを聞き出すほかにない。

「リチャード！」

「おい……レベツカ、……って、奴を……！」

「なに？ 聞こえないよ」

「俺は大丈夫だ、戻って奴を倒せ……！」

一息で吐き出すように。俄には呑み込めない言葉。

「できるわけないでしょ！ そんなこと！」

「……いいか。奴は弱っている。今倒しておかないと……また誰かが……」

「それは……」

「俺に構うな……。お前はお前に出来ることを全うしろ」

「私……私はリチャードを助けます！」

「だが血清はないんだらう……？ もう諦める、俺は大丈夫だ」
「……」

死ぬときは死ぬ

それが私たちの仕事。

……。

「できませんよあ……」

「……なんて面してんだよ」

それはあなたの方でしょう、という軽口を思いついたが、とても声に出して言える状況ではなかった。
主に私が。

「……泣くな。笑えよ」

「む、ムリです……」

「なら代わりにこれを……」

苦しげに腰に手を回し、デスマスクを取り出す。

先の戦闘の前に回収できていたんだ。そのまま咄嗟にベルトに挟んでいたようだ。

「何かのアイテムなんだろ……？ 俺の代わりに持っててくれ……」

差し出された仮面を受け取る。

彼は僅かに微笑んだ。

「……笑ってるだろ」

「……どこがですか」

？鼻を封じられた仮面？。笑ってはいない。

「んあ……、そろそろいいかな」
「クリスー!!」

柱の陰から気まずそうな顔つきのクリスが現れた。リチャードの怪我を心配しているようだが、それ以上になんだか呆れているようにも見える。

「傷はそれほど大きくはないんだろう？ 血清は今ジルが取りに行つてる。安心しろ」

「クリス……、アルファは来たのか。……気をつける、この館はヤバイ。とんでもない化け物がいるぜ……」

「ああ、話は聞いたよ。……もう喋るな。後は任せろ」

それを聞いて楽になったのか、緊張の糸が切れたのか、目を閉じて静かに意識が遠退いていった。

「つたく、恰好つけやがって。バカやろうが」

「迷惑をかけました……」

「……リチャードの傍から離れようとしなかった、きみの判断が間違っているとは言わない。それは人としてとても大切なことだし、当たり前前に考えてしまうことだ。……ただ俺たちは普通の人ではないけないんだ。わかるだろ？」

俺たちはより多くの人々を助けなければいけない。そのためには命を懸け、仲間の犠牲を乗り越える必要があるかもしれない。警察つてそういう仕事だろ？」

「私自身は覚悟できています。でも苦しんでいる仲間を見捨てることは、私にはできません……」

「そういうことじゃないんだけど……。まあ今はわからなくてもいいよ。きみはまだ若い。……ちなみにいくつだ？」

「……一八です」

「その歳ならそれくらいじゃないと逆にダメかもな」

ははは、と軽く笑う。

「ただこの職に就いたからには、この先何があるとも、覚悟だけはしておけよ」

「……もう十分何かありましたよ」

「それはそうかもな、うん。」

よし、とにかく、この館に生存者がいるかはわからないが、リチャードがやられちまうような強敵がいるんなら、放つとくわけにはいかないよな。リチャードのことはジルに任せて、俺ときみで、その化け物を今度こそ倒してやろうぜ！

おいおい、そんな顔しなくても大丈夫だよ。ここはちゃんとクリアされてるから安全だ。もっとも、俺たちが化け物に抜かれちまったらヤバイかもしれないがな」

「なるほど、さすがにでかいな」

屋根裏部屋に戻ると、大蛇は部屋の中心で尾を巻いてうずくまっていた。死んでいるわけでも、眠っているわけでもないようで、握り

拳大の黄色い眼光がすでに私たちに向かつて無視できないプレッシャーを放っている。しかし受けたダメージの影響か、それ以上、さっきのように首を持ち上げて大口開けて威嚇することはなく、まるでリチャードと同じ状態だ。

「よし、俺が前できみが後ろだ」

「了解。気をつけて。死んだフリってこともありますから」

軽く右手のリボルバーを振ることで応えて、さつさと前進していく。まるで慎重さを感じない歩きぶりだが、大丈夫だろうか……。

大蛇の数メートル手前まで接近し、頭部に銃口を向ける。その様子をいくら疲弊しているとはいえ大蛇が見過ごすとも思えず、実際、黄色の瞳の中のほとんど線の黒目はたしかにクリスを捉えているので、離れて見ているこちらがおたおたしてしまう。

引き金に手を掛けた、瞬間　！

弾かれたようにその巨体がクリスに襲いかかる　が、予想していたのか、何ということも無く体を翻し、喰らいかかる口腔に手榴弾を放り込みながら躲してみせた。

回避行動でちょうど大蛇の顔の側面に立つ。一方の大蛇は渾身の一撃が外れ隙をつくっている。

この瞬間に勝負は決していた。

クリスは僅かに後退し、しかし近距離でもってリボルバーを構えて、撃つ。

四五口径の銃口から放たれた凶悪なマグナム弾は、大蛇の分厚い脛

を抉り、右目を貫いた。それとほぼ同時に、先の手榴弾が腹の中で、リチャードのときよりもさらに上部、頭部の近くで爆発する。

一連の攻撃で、大蛇はもはや声にもならないほどの決定的なダメージを負い、暴れることもなく沈黙した。

死んだ……のか？

「手強い相手だったな」

「私、なにもしてません……」

はふう、なんて具合に一息ついて戻ってくる。

それにしても、なんていう早技。

さすがS・T・R・A・Sのエース・オブ・エース。

格の違いというものをまざまざと見せつけられた気分……。

「奴はもう瀕死の状態だったからな。やればきみでもできたよ」

「できませんよ！」

どうやら間違いなく大蛇の息の根は止まっているようなので、屋根裏部屋を後にした。

S u r v i v e y o u r s e l f a n d S e a r c h f o u r t h e

ご意見、ご感想、アドバイス等お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2627y/>

素敵な恋は夜明けと共に！

2011年12月11日10時47分発行